

政治家としてのダンテ

一 ファイレンツェの政争

ダンテは詩聖として名を萬代に傳へてゐる。これは正當なことである。しかし實を云へば、彼の本職は、通常詩人などとは正反對なものであると思はれてゐる政治家であつた。彼の一生の運命を決定したのは、藝術でもなく、哲學でもなく、全く政治であつたのである。彼の想像力は恐ろしき迄に豊かなものであつたが、彼は單に詩人として情緒生活に一生を投じ得なんだ。彼の智的慾求は飢えたる者のごとくに猛烈なものであつたが、決して一學徒として生涯を送り得なんだ。彼は詩の世界に悠々逍遙すると共に、また智力の世界に先人未踏の地を開拓すると共に、彼の理想、彼の信念を、この世界に實現させずんば満足し得なかつた。詩の世界より政治の世界へ！これはダンテにとりて必然の道であつた。理想と現實、詩と政治とを截然區

別して、自ら理想の世界に孤高の生活を送り、詩の世界にひとり夢みるときは、ダンテにとりて到底不可能であつた。

凡そ偉大なる人物は、詩人にもあれ、哲人にもあれ、宗教家にもあれ、必ず單なる抽象的觀念に止まり得ないものである。いかに美しくとも、氣高くとも、決して單なる主觀的甘美に陶醉することをしない。必ずや偉大崇高なる世界に飛翔した靈魂を、再び俗醜汚なこの現實世界にひけて、茲にその理想、また幻影を實現せんとこの意志を猛然として起こさずには措かない。高遠なる理念の世界に高翔してゐた哲人プラトオンは、その理想を實現せんとする熱望に驅られて「ポリテイア」(共和國)を書いた。神に憩ふまで我が靈魂は安んぜずと叫ぶ迄に神に憧れた聖アウグスティヌスは *De Civitate Dei* —「神の都」—の歴史哲學書を書いた。「神に醉える」孤高の哲人スピノザに「Tractatus Theologico-Politicus」 —「神學政治論」—がある。わがダンテには、政治哲學史上重要な位置を占むべき *De Monarchia* —「帝政論」—があ

る。古代希臘の悲劇詩人アイスキロスおよびソフォクレスは、共に政治に多大の興味を有してゐた。アイスキロスの「プロメセオス」のごときは、政治詩であると稱せらる(E. G. Hartman: *The Prometheus Bound*, 1920. を見よ)。またことに、偉大なる靈魂は、一度は必ず天にまで翔らねばならぬ。しかし其後必ず地上に馳せ下らねばならぬ。この意味に於て、政治的慾望なき者は、眞理に對する熱誠に於て缺くるところありと云はねばならぬ。

ダンテは個人として其屬する社會に負ふ義務を強く感じた。詩人たることをもつて、社會に對する積極的奉仕に怠慢たる口實とは考へ得なかつた。否寧ろ詩人たるがゆゑに、即ち詩人として他の人々の見るところよりも高き幻影と理想とを見るがゆゑに、一層社會に對する責任を強く感じた。彼は幾度か神曲のうちに、フィレンツェ市民が、公共の義務の負擔を回避しようとするのを叱咤してゐる。ダンテは熱烈な

る愛國者であつた。「新生」に示さるゝごとく若うして戀になやむ抒情詩人とはなつたが、然し他面に於て彼は「男性中の男性」なるものであつた。ダンテは認識すべく智性を、理想化すべく想像力を、而して實行すべく意志を有してゐた。ペアトリチエに對する熱情の眞中にも、既に述べたやうに、フィレンツェのために劍を採つて立つたことが本當であるらしい。後政治に一身を投ずるに至つた。ダンテの家は元來グェルフ黨に屬してゐた。當時フィレンツェの市民はそれ／＼組合をつくつてゐた。それは大組合、小組合—*Arti maggiori*, *Arti minori*—の二つに大別されてゐた。前者は、公證人、織物商、兩替商、羊毛商、藥種商、絹布商、毛皮商の諸組合を包括し、後者は、織物小賣商、屠夫、靴工、大工、鍛冶工などの諸組合を包括してゐた。そして政治に參與するには、是非以上の組合の一に加入せねばならなかつたので、ダンテは其中に於て最も財力ゆたかにして有力な醫師藥劑商の組合 (*Arte de' Medici e Speciali*) に入會し、*Dante d' Aldighieri degli Albighiere poeta fiorentino* といつ

即ち「フィレンツェの詩人」として記入せられたと云はれてゐる。ダンテの入會の期日は多分一二九五年であつたと思はれる。彼が醫師藥劑商の組合に入るやうになつたのは、當時藥劑商店が書店であり、自然、藝術家達や文學者達の集會する處となつてゐたからであらう。

一二九五年の春、ナポリおよびアンジユの王シャルル二世の長子カッロ・マルテロ (*Carlo Martello*) が、威風堂々、二百騎を従へてフィレンツェを訪れ、三週間滞在した。彼とダンテとは多少の親交があつたらしい。天國篇八の五五、六にマルテロはダンテにむかひ「汝はいたく俺を愛したが、それには大いに譯があつた」といひ尙ほ自ら存命しをつたならば、實のある好意を表したであらうと云つてゐる。この言葉より察するに、當時既にダンテはフィレンツェの政界に大分認められてゐたのである。

その頃フレンツェに於いて、権力が一個人に集中することを恐れ、二ヶ月を任期とする行政長官「プリオレ」(Priore)を一時に六人選舉する制度になつてゐた。一二九五年の十二月十四日にダンテは、この「プリオレ」の選舉に投票をしてゐる。また一二九七年の六月五日に、百人會議に參列してゐる。一二九七年より一三〇〇年の間に大分負債をした。一二九七年の四月十一日に、彼と其異母弟のフランチェスコとは、少からの金額を人より借りてゐる。更にダンテは舅のマネット・ドナティを保證人として、一二九七年の十二月二十三日に借財をしてゐる。此外更に負債をして巨額に上り、漸く一三三二年即ちダンテの死後十一年に至つて、彼の子ビエトッコとジャコボ、および彼の異母弟フランチェスコとが返済した。リオナルド・ブルニの云ふところによれば、ダンテは富裕とは云へなかつたが、相當財産を有してゐたといふ。然るに政治に關係して以來、遂にこれを費消し、負債をなすに至つたのである。

らう。自己の政治的手腕については餘程自覺を有してゐたやうに見える。羅馬へ使節派遣を議せられた時、ダンテは“Di io sta chi va? e s'io vo chi sta?”「われ若し行かば誰が止まるか。また我れ若し止まらば、誰が行くか」と豪語したといふ。これは傳説に過ぎないとしても、彼の政治家的自信が仄見えてゐる。彼は極めて果斷に富む人物であつた。必要あらばクウ・デターでも遣り兼ねまいどころがある。

ダンテの家はゲルフォ黨に屬してゐたが、然も彼はゲルフォ黨の黨利などを眼中に置かず、自由に自己の信するところに向つて勇往邁進した。流竄中彼は主としてギベルリノ黨の諸侯の宮廷に身を寄せた。而も是を以つて彼がギベルリノ主義に賛成したと見るのは大なる誤りである。彼は獨立獨歩、真理と思ふところにむかつて進んだのであつた。彼が如何に博大崇高な政治的理想を抱いてゐたかは、彼の著「帝政論」のうちに見ることが出来る。われらは先づ、ダンテの政治的運命に大なる影

響を及ぼせる中世に於ける教會と帝國との抗争について述べ、フィレレッツェの政争について一瞥し、次いで彼の流竄の跡を辿り、最後に「帝政論」について記さねばならぬ。

* * *

宇内を包括する「神聖羅馬帝國」と、靈界を統一する「神聖羅馬教會」とは、凡そ人類の頭腦に浮び得し制度の最高最大なものであらう。これは遠くヘブライの神政々治の理想に由來するものであるが、ヂュムス・ブライスの名著『The Holy Roman Empire』を読み、嘗て人類がこの壯烈なる政治的統一と宗教的統一とに努力した跡を見て、感激せざる者があらうか。この二大制度の争闘は歐洲中世史上の偉觀であつて、またダンテの政治的運命に大なる影響を及ぼしたので、以下簡単に帝國と教

會との關係について述べねばならぬ。

第四世紀にコンスタンティヌス大帝は基督教を羅馬帝國の宗教とした時、彼は自ら國家の主權者であるがごとくに、方しく教會の首長であるを考へた。同じく紀元八〇〇年の基督降誕節の日に、フランク王シヤル・マニユが羅馬皇帝となつた時、自らコンスタンティヌス大帝の後繼者を以つて任じ、斯くて國家と教會と二つながらの主權者であるを考へた。彼の死後、彼に比儔し得る人物なく、また歐洲諸國の事情も變遷し、羅馬帝國と稱するも、有名無實に過ぎなくなつてしまつた。しかし紀元九六二年オット一世は羅馬帝國を再興した。世にこれを獨逸帝國といふ。オット大帝以後十二世紀まで獨逸歴代の皇帝は羅馬帝國再現に努力し、伊太利亞の經營に勢力を傾倒し、帝權が甚だ強くなつた。就中十一世紀の中頃に皇帝位にのぼつたフランコニヤ家の、ハインリヒ三世は勢力を揮ひ、しばしば法王を廢立し、教會に干

涉した。さて皇帝位が充分統御的能力を有する人物によりて保たれ、そして法王位が俗権的野心なき人物によりて占められてゐる限りは、別に事なくして済んだであらう。しかし十一世紀の後半に至つて状態が逆倒した。一〇七三年に於て法王位に多くの點より見て嘗て此に坐せし者のうち最も偉大なる人物が、登つた。既にグレゴリウス七世と稱せられるヒルデブランドこれである。彼は信ずるところに向つて勇往邁進し、賢明にして殆んど古代東方諸國の專制的君主の如き武斷的意志を有し而して正義を愛し、不義を憎惡することの極めて猛烈な人物であつた。而して神の國といふ崇高な理想實現の熱誠に促されて、一切の個人的利害を此に従屬せしめ、不撓不屈の熱誠をもつて起つた。古來よりヘブライの豫言者達が渴仰し、多くの聖徒が祈願し、遂に基督が生命をもつて贖ひ、而して數多の殉教者達の血によつて基礎づけられた神の國は、ヒルデブランドにとりては、分離し墮落し野心ある武將等の餌食となれる帝國によつて實現されてはならぬものであつた。それは只、神によりて

創始されたところの、永遠にして世界的なる、而して絶對的な權威をもつて萬國萬民諸王を號令すべき教會であらねばならなかつた。教會の主長として法の法王は、無論、世界の最高主権者であらねばならなかつた。斯くの如き制度を確立し、この懼るべき絶大な特権を確立することに、ヒルデブランドは熱烈にして撓まざる精力を以つて、身を委ねた。

斯くて茲に教會と帝國、法王と皇帝との間に、主権を争ふ長い戦闘が開始せらるゝに至つた。そして争ひの直接の原因は僧職任命權に關してであつた。そもく帝國内に於ける僧職は、皆土地を皇帝より受けてゐたので、謂はば一定の義務を皇帝に負ふところの半官吏であつた。皇帝の封建的臣下であつた。皇帝に對して忠誠を誓ひ、斯くて任職されたものであつた。然るにヒルデブランドは教會の主長として凡ての僧職は只法王にのみ從屬すべしと宣言し、僧にもあれ、王にもあれ、貴族にもあれ、平民にもあれ、平信徒より任命を受くることを嚴禁した。茲に於て全歐洲

に亘る争闘が開始された。以後この二大権力の戦ひは、時に教會の勝利となり、時に帝國の勝利となつた。

ヒルデブランドは先づ第一に、擅に僧侶を任免せるハインリヒ四世を破門し、その臣民に對して皇帝に服従する義務を解除することを宣言したので、諸侯および人民の多くがハインリヒより離反した。ハインリヒは遂に窮して法王に謝罪せざるを得ざることとなり、妻子と一人の從者とを從へ、嚴冬アルプスを越え、一〇七七年一月、漸く法王の妹、トスカナ伯爵夫人に頼りて和解を乞ふた。しかし法王は尙ほカノッサ城の門を閉鎖して入れず、皇帝たるハインリヒ四世は裸足のまゝ、積雪の中に立ち、懺悔の意を表すること三日にして、始めて謁見をゆるされ、法王の足下に跪伏して哀願し、破門を取消された。この一事により法王の權威の如何に絶大であつたか分かる。

ヒルデブランドの後百年、十二世紀末より十三世にかけて、法王インノケント三

世は、ホエンシタウフエン家の衰微に乗じて屢皇帝を廢立し、英佛諸國の政治に干渉し、十字軍を起し、宛然歐洲全土の統御者たる觀があつて、法王權は絶頂に達した。此に反して皇帝の權威は甚しく失墜した。インノケントは、法王は地上に於ける神の代理者であると主張し、教會の帝國に於けるは、太陽の月に於けるが如しと斷言した。

しかしフリドゥリヒ・バルバロッサおよび彼の孫フリドゥリヒ二世の下に、帝國の勢力は勃興するに至つたが、一二六六年、即ちダンテの誕生一年後に、ベネゼントに於てホエンシタウフエン家が敗北して以來、伊太利亞に於ける獨逸皇帝の勢力は遂に破滅し、教會の勝利は完全となつた。かくて一三〇〇年、即ちダンテが神曲の發端とした其年に、ボニファキウス八世は、帝冠、法冠、および劔を帯びて、自ら、羅馬に群がる巡禮達に對して、聖ペテロの後繼者たるごともに、アウグストゥスの後繼者即ち「カエザルにして皇帝」であると宣言した。しかし後佛蘭西のフィリップ四世と

衝突してボニファウスは一二三〇三年に憤死するに至つた。

斯くの如くにして、ヴォルテアが嘲罵して「神聖」でもなく、「羅馬」でもなく、「帝國」でもないと言つたところの「神聖羅馬帝國」と稱する觀念が、善かれ、悪かれ甚大なる影響を世界に與へた。それは長期間の争闘によつて獨逸の勢力を消耗せしめ、貴族と僧侶との權力を大ならしめ、皇帝の權力を減殺するに至つた。佛蘭西と英國は其間に中央集權の國家を形成し、獨逸は反對に、地方に於ける封建的諸侯が勢力を得て、國家的統一を危くした。即ち他の諸國にとつては政治的統一を助成する勢力となつたものが、獨逸にとつては政治的統一を妨害するものとなつた。伊太利亞も同様に惱まされた。歐洲諸國は相繼いで國民的自覺に達し、國家的統一を成就したのに、獨逸と伊太利亞とは政治的統一を遂行した最後の者となつた。即ち伊太利亞はマッツイニを豫言者とし、ガルバルディ、カヴール等の愛國的熱誠によつて統一を全うし、獨逸は、鐵血宰相ビスマルクの天才によつて漸く十九世紀に統一を見るに至つたのである。

るに至つたのである。

以上は中世紀に於ける教會と帝國との抗争の概観であるが、その間に伊太利亞の諸都市は大いに惱まされもしたが、大なる利益をも得た。即ち約百年の間諸都市は皇帝の干渉を免れたのみならず、時には皇帝に味方し、時には法王を擁護して、兩者より利權を獲得し、獨立の基礎を築きつゝあつた。フリドリック・バルバロッサが軍勢を率ゐて南下し、諸都市の代表者達を召集した時、主權がロムバルディアの諸都市によつて行使されるのを見て甚だ愕いた。そこで皇帝位の尊嚴を支持しようと決心した皇帝と、そして自己の力を誇り、苦戦して獲得した獨立を保持しようとする等しく決心した諸都市との間に、到底争闘は避くべからざるものであつた。三十年間は勝敗いづれとも決しなかつた。皇帝は四度征討の大戦を試みて、羅馬、ミラノその他重要な都市を占領した。然し一一七六年に行はれたレニャノ—Legnano—戦役

に於て皇帝は全然敗北してしまつた、その後六年、即ち一一八三年にフリドゥリヒと諸都市との間に條約が締結されて伊太利亞の諸都市の獨立が承認されたが、これ歐洲に於ける、主權者と、自由によつて勃興せし臣民との間に結ばれた最初の條約であつた。

斯くして諸都市は自治權を獲得したので、兵備を整へ、版圖を擴張した。主權は依然として皇帝にあつたが、大いに制限され、法律的基础に於ける自由を確立した次いで諸都市に讓歩された自由が伊太利亞全土に亘つて承認さるるに至つた。そこで法王と皇帝との争闘は苦々しいものではあつたが、斯くの如き好結果を伊太利亞に與へもしたのであつた。而も伊太利亞の諸都市は、この一々猜疑しあうて、自ら暴君等の容易な餌食となつた。そして法王と皇帝、佛蘭西と獨逸、新しき商業的平民と舊き封建的貴族との錯綜せる争闘は、只に諸都市をして互ひに戦はしめたのみでなく、各都市の住民をして、分離し、對峙して、争はしむるに至つた。我等は次に

フィレンツェに於ける政争と、その渦中に投じたるダンテの政治的運命について見ねばならぬ。

無秩序と混亂との甚しき點に於て、ダンテの時代に於ける伊太利亞にまさるものが歴史上に餘り多くない。伊太利亞といふも、單に地理上の名稱に過ぎずして、内に幾多の小國があり、殊に國家進化史上の變態的現象とも云ふべき許多の都市が國內に相對峙して、互に争闘しあつてゐた。その政治的關係は極めて錯綜してゐて、此を領解し、叙述することが容易でない。剩へ、獨逸および佛蘭西はこの紛亂に乗じて、交々伊太利亞を己が勢力圏内に置かんとして侵入し、ために國土は兩國の戰場となり、常に荒らされ、破壊せしめらるゝに至つた。法王はまた俗權獲得に熱中

し、伊太利亞は三重にも四重にも紛糾せしめられた。無論政治道德などいふごときものは寸毫も顧みられずして、權謀術數は政權爭奪の常道と見做され、陰謀暗殺は寧ろ正當な政治的常識であると考へられた。この亂狀に堪へかねてダンテは奮然として起つたが、到底この洪水を堰きとむるに由なく、遂に自らも此洪水のうちに衝き流さるるに至つた。フィレンツェの當時の政治状態を領解するために、グェルフ黨とギベリノ黨、商業的平民と封建的貴族との鬭争について以下簡單に述べることにする。

帝國と教會との抗爭は、種々に變化せしめられて、伊太利亞全土に行き亘つてゐたが、就中フィレンツェに於て甚しかった。擡頭しつゝあつた佛蘭西は、獨逸帝國の勢力を伊太利亞より排斥せんとして努力した。法王はまた俗權を確保せずしては安全たり得ずと考へ、その手段として、少くとも一時は、佛蘭西と提携するの有利であ

るとした。中世紀の伊太利亞に絶えず現はれる黨派の名稱が二つある。即ち「グェルフ」黨および「ギベリノ」黨これである。グェルフ——Guelph——およびギベリノ——Ghibellino——云ふ名は、元來、Welf 及び Weiblingen といふ獨逸語の伊太利亞語形である。前者は十世紀十一世紀に於てバウリア公たりしものを出した獨逸の豪族であつた。後者はフランコニアにありし或る城の名稱で、スワビア系諸皇帝の屬してゐた一族の名となつたのであつた。一一二五年、グェルフ系のロテア——Lothair——が皇帝に選舉されたのが、兩族の争ひの原因となつたと見える。そして一一四〇年の十二月二十一日ヴィンスベルヒ戰役に於て、始めて Welf 及び Weiblingen といふ名が國の聲として使用された。これが伊太利亞に入り、遂にそれぞれ、法王、皇帝擁護黨の名稱となつた。しかし歲月の経過とともに、本來の主義は變遷し、單に國民的、階級的、門閥的、また個人間の争鬭になつてしまつた。兩黨とも、自己の目的を達し、反對黨を追放し得るかぎり、或は法王に味方し、或は皇帝を援助す

するところの機會主義に變つてしまつた。

井ラニに據れば、ゲルフォ、ギベリノ兩黨がフィレンツェへ入つたのは、一二一五年の復活節にブオンデルモンテ・デ・ブオンデンモンティ—Buondelmonte de' Buon-delmonti—がアミデイ—Amidei—家の者に殺されたがために起りし争闘を機會にしたものであると云ふ。ブオンデルモンテはアミデイ家の一貴女と婚約してゐたと見える。然るにモスカ・デ・ラムベルティ—Mosca de Lambertini—といふ者の使唆によりこれを破約して、ドナティ家の女と結婚するに至つた。そこでアミデイ家の者が復讐として彼を殺した。かくてアミデイ家とともにブオンデルモンテ殺戮に與かつたウベルティ—Uberti—家との間に苦々しい怨恨が生じた。これを機會にゲルフォ、ギベリノ兩黨の争闘がフィレンツェへ入つた。ゲルフォ黨はブオンデルモンティ家を、ギベリノ黨はウベルティ家を、おの／＼首領と仰ぐに至つた。天國篇一六の一四〇、

一四一に、ダンテの祖先カッチアグダは此事件のことを述べて——

お、ブオンデルモンテよ、他人の勧めに従ひ

婚姻を逃げしは如何に悪しかりしぞ。

と云つてゐる、「ただ斷行あるのみ」と教唆して、この兩家の争ひの種を蒔いたモスカをダンテは地獄の第九囊ボルジャに置き、両手が切斷され「残れる腕を蹴める空に差しあげ、かくて顔を血に汚よご」せるものとして描いてゐる——地獄篇二八の一〇三—五。その後、フィレンツェに於ける兩黨の運命は常なく、一二一五年より六十三年間繼續して、一二七八年に至つて、遂にゲルフォ黨が最後の勝利を得た。

既に云つたやうに、ゲルフォ、ギベリノ兩黨の抗争は、それぞれ法王擁護、皇帝

擁護といふ抽象的理由のほか、一層實際的な理由が存してゐたのであつた。即ちそれは商業的平民對封建的貴族の階級的闘争であつた。前者は産業的新時代を創造せんと努力した新興の階級であり、後者は過去の光榮の誇りに生き、時代の潮流に逆行して、ひたすら自己の特權を維持せんとした貴族階級であつた。そもく十字軍の大運動は、巨大なる富を伊太利亞の諸都市に齎らした。伊太利亞は東西兩洋の交通の要路にあつたので。自然に經濟的恩惠を大いに受けた。そこで擡頭しつゝありし新興の商業的平民階級は、封建的貴族と優越を争ふに至つた。しかし決定的な解決の見込は到底立たなかつた。一黨が壓迫せらるれば、その黨派は他の都市に於ける友黨の援助を仰いで争ひ續けるといふ状態であつた、かくて伊太利亞全土は四離滅裂となつた。そして何れの階級も、自己の利害より打算して。時には皇帝に味方し、時には法王を擁護するといふ有様であつた。そして互ひに流血の報復沒收、焚燒、殺戮を交換しあつてゐた。然し其間に、フィレンツェはいよ／＼人口が

増加し、産業は盛大となり、富と勢力とに對して誇りを感じずるに至つた。そして時代の大勢は其都市としての獨立に好都合であつた。

フィレンツェの貴族等は、云ふ迄もなく、傳統的また利害關係よりしてキペルリノ黨に屬するに至つた。そして、既に述べたごとく、ウベルティ家がその首領となつた。此に對してブオンデルモンティ家は、ウベルティ家に對する敵愾と怨恨とよりして、中流階級に味方し、ゲェルフォ黨の首領となつた。そして其後約五十年間に亘りし内亂に、一種特別な苦々しき激烈さをあたへた。ヴアルテアは例の辛辣な皮肉な言葉でもつて「自由を愛しつゝ、自由を破壊せんとして最善をなしつゝあつた」と云つてゐる。ダンテは煉獄篇六の一四九—一五一に於てフィレンツェのことを――

Vedrai te simigliante a quella inferna,

Che non può trovar posa in sulle piume,

Ma con dar volta suo dolore scherma.

羽のうへに憩ひ得ずして轉帳し

おのが苦惱なやみをまぎらす病女に

汝の似るのを見るであらう。

と云つてゐる。

410

さてこの階級的闘争の第一戦に於て、平民側のグェルフ黨は敗北して、その有力なる人々は追放され、その財産は没收された。即ち一二四八年に皇帝フリドゥリヒ二世は、法王黨の勢力を殺がんにために、フィレンツェのギベッリノ黨の首領ウベルティ家を援助して、グェルフ黨を追放するに至つた（地、一〇の四八）。しかし二

年を経ないうちに、人民はギベッリノ黨の貴族等の專制的な政治に堪へ切れずなり、始めてその實力を發揮した。即ち一二五〇年の十月二十日は、フィレンツェの年代記に於て特筆せらるべき日であつた。その日に朝より人民はサンタ、クロチエに於けるフランシスクス派の會堂の前に集合した。そしてウベルティ家および貴族等の襲撃に備へんがため、終日武装してゐた。人民は極めて敏活に、フィレンツェ共和市の憲法を再興し、「ボデスタ」職を廢して、その代りに「人民の首長」を立て、これに市の軍事的指揮權を與へ、また「ボデスタ」の司法權をも授けた。市民を二十團體に分類し、上官の召集に直ちに應じて出勤すべきことを定めた。

411

最高の立法權は、十二人の Signori——即ち人民の長老に委任した。此等十二人は食を共にし、官舎に眠り、相連らねてゝなくては、決して單獨にて外出することが許されなかつた。任期は僅か二ヶ月であつた。後憲法が少しく修正されて「ボデス

「職を復興し、「人民の首長」を監督せしめた。而して Signoria—長老會議—は絶えず開會して、兩者を更に監督した。云ふ迄もなく、斯くのごとき制度は、市政の不安定と不斷の軋轢とを曝露するものであつて、如何に當時に於ける市民が公共的精神を缺いてゐたか、また官吏等の腐敗が如何に甚しかつたかゞ分かる。人民は一人または一階級に権力が集注された結果被るに至りし苦々しい暴虐について良く承知してゐたので、専制を除かうとし、斯く権力を成るべく分割したのであつた。そして二ヶ月なごゝいふ短い任期にしたのであつた。然し是では成る程、専制的権力の出現を防止し得たであらうが、同時に、有力な政府を立てることも出来なかつた。ダンテは煉獄篇六の一四〇—一四七に於てフィレンツェのこの不安定な制度のことを述べて「十月に紡いで十一月の半に到らない汝」と稱し、更に——

なんぢの覺えをる期間にすら、法律

貨幣、官職、および慣習を幾度

汝は變へ、また吏員を新たにしたかよ。

と云つてゐる。

さて勝利を得た人民は、將來宮殿に八十呎以上の櫓を築造すべからずと定め、フィレンツェ共和市の旗を變更して、赤地に白百合花の紋章を、白地に赤百合花とした。かくてピサを従屬せしめ、ピストイアを従屬せしめた。そして勝ち誇る人民は、追放されたゲルフォ黨を召還し、十年間フィレンツェは繁榮した。しかし一二五八年に至り、ギベリノ黨の貴族等は、ウベルティ家を中心として陰謀を企てた。これが發見されて、人民は警鐘によつて召集され、ウベルティ家に殺到し、主なる隠謀家等を斬首した。またウベルティの砦の城壁を毀ち、以後この地點は呪はれ、この地點に

影を落さぬやうに建築物が建てられた。今日は大なる廣場になつてゐる。

敗北したギベルリノ黨はシエナに據り、フィレンツェに宣戦した。ファリナタの教唆により、マンフレディ王は此を應援して、八百の騎兵を派遣した。フィレンツェのグエルフ黨は三萬の歩兵と三百の騎兵を整へて進軍した。一二六〇年九月四日、モンタペルティで會戦した。この日のことを述べてダンテは地獄篇一〇の八五、六に――

.....Lo strazio e il grande scempio

Che fece l' Arbia colorata in rosso,

.....アルビア河を赤く

彩つた殺戮と大なる破壊

と云つてゐる。アルビア河とはトスカナ州の流であつて、モンタペルティの丘はこの左岸にある。この戦役の行はれたのは、ダンテの誕生前五年であつたが、恐ろしい殺戮の情況が、彼の幼年時代に語り傳へられたものであらう。フィレンツェ軍は全滅し、二千五百の死骸を戦場に遺棄し、精兵が千五百人以上俘虜となつた。グエルフ黨は直ちにフィレンツェより退去し、ギベルリノ黨は凱歌を擧げて祖國の都に歸還した。しかし歸還して見れば、彼等の家は悉く破壊されてゐた。荒廢せるフィレンツェ市は、彼等の眼に價値なきものに見えた。そこでギベルリノ黨の首領會議に於てフィレンツェ破壊が殆んど決議されようとした。然し只ひとりファリナタ、デリ、ウベルティのみは斷乎として反對した。ダンテは云つてゐる。この提議が呈出さるゝや、彼は憤然として起ち上り、フィレンツェの破壊さるゝのを見るよりは、寧ろ同盟者等にむかつて我が劍を向けるだらうと宣言した。彼のこの決心のためにフィレンツェは破壊より免れることが出來た。ダンテは此勇氣と愛國心を非常に嬉しく思つてゐ

た。そこで彼はファリナタを地獄に於ける異端者の燃ゆる墓の中に投じてはゐるが、それを「恰も地獄を大いに蔑すむごとき」英雄的人物として描き、讀者をしてその崇高な勇氣に感嘆せしめてゐる。

さてギベッリノ黨の歸還とともに民主的憲法は廢棄され、五ヶ年の間、貴族等がフィレンツェを專制的に支配した。しかし遂に彼等の權威が永久に一掃さるゝ日が來た。即ち一二六六年二月二十六日、ベネゼントに於て、ギベッリノの擁護者であつたマンフレディ王が、アンジユのシャルルのために敗られて戰死するに至つた。マンフレディは皇帝フリドリヒ二世の庶子であつたが、父と同じく詩人であり、樂人であつた。ダンテは煉獄篇三の一〇七、八に彼のことを述べて――

Biondo era e bello, e di gentile aspetto:

Ma l' un do' cigli un colpo avea diviso.

彼は金髮青眼にて美しく容すがたは優しかつたが
打撲が一つ眉の片方を裂いてゐた。

と云つてゐる。

勝利を得たグェルフォ黨は、一二六六年の九月に、ギベッリノ黨をフィレンツェより追放した。また兩黨調停の一策として、ファリナタの娘を、グェルフォ黨のグガド・カ
ブルカンテーダンテの「第一の友」に政治的結婚をなさしめた。然し翌一二六七
年に、グェルフォ黨はギベッリノ黨の殘徒を追放し、フィレンツェの統治權を十年間、
アンジユのシャルルに提供した。以後ギベッリノ黨は永久フィレンツェに於て勢力を
回復することが出来なかつた。

ベネゼント戦役後フィレンツェに歸還したグェルフ黨の貴族は努力を揮ひ、追放したギヘルリノ黨の財産を沒收し、法王ウルバヌスの命令により、その一部分を市へ、一部分を、損害を被むりし自黨の人々へ、更に一部分を自黨自身へ分割した。彼等は黨勢擴張のために莫大な基金を積み立てた。そして精到な組織をつくり、集合すべき館を建て、秘密委員を設けた。かくて彼等は傲然として商人階級にのぞみ、自己の權利を主張し、重税を課した。そこで人民は不平を抱き、一二八二年に第二回目の民主的勃興があつた。新しい憲法が制定され、中流階級の手で政權が掌握され商業上或は職業上の組合が政治的勢力の基礎となるに至つた。フィレンツェに於ける此等の組合は秩序整理たる組織を有して、組合の利權の維持擴張に努力したが、後には政治的團體となつた。一三〇〇年頃には、大小十四の組合があつたといふ。新しき憲法は此等の組合を市政の基礎としたものであつた。そして行政の首腦に、六大組合を代表する六人の「ブリオレ」——Priore——が置かれた。「ブリオレ」の義務は

「財政を管理し、萬人に正義を行ひ、強大なる者に對して、弱小無力なる者を保護すること」であつた。「ポデスタ」は司法權を掌握し、軍事的指揮權は、既に述べたやうに、「人民の首長」に委任された。六人の「ブリオレ」の行動は、人民の代表者達より成る「百人會議」によつて限定され、その協賛なくしては、何等の重大事を行ひ得なかつた。「人民の首長」に對しては、八十人より成る特別會議があつた。此等のものゝ下に、人民の「一般會議」があつた。「ポデスタ」は「八十人會議」と「一般會議」とに諮問して職權を行使した。

斯く人民が新憲法を制定して民主的政府の確立に努力しつゝあつた時、追放されしギベルリノ黨はアレツツォ人の援助をうけ、一二八九年、武力によつてフィレンツェに歸還しようとしたが、同年六月十一日のカムバルディノの戦役に於て慘敗してしまつた。既に述べたやうに、この役にはダンテ自ら參加したと考へられる。また此時ア

レツツォのギベッリノ黨の首領ブオンコンテ・ダ・モンテフェルトッロの——Buonconte da Montefeltro——の屍體は、戰場に於て發見せられなかつたと傳へられた。煉獄篇五の一二四—七に於て、彼は己が屍體の運命について云つてゐる——

Lo corpo mio gelato in sulla foce

Trovò l' Archian rubesto ; e quel sospinse

Nell' Arno, e sciolse al mio petto la croce

Ch' io fei di me quando il dolor mi vinse :

剛健なるアルキアノは河口眞際まきはに

わが凍えた體を見てこれをアルノに

押し流し、かくて痛みが俺わしを服した時

わしの自ら造つた十字をわが胸の上に解いた。

同年、カプロナの陥落（地、二一の九四—六）が遂にギベッリノ黨の運命を全然封じ去つてしまつた。後二十年、ギベッリノ黨の希望は、皇帝ハインリッヒ七世の伊太利亞南征の際に輝くよと見えたが、「流竄」の項に示すごとく、空しく消え去つてしまつた。

フィレンツェは、斯くして、ギベッリノ黨に對しては決定的な勝利を得たが、自己の市を統治する專制的特權階級に對して、まだ一戰はねばならなかつた。一二九三年に一つの革命が起り、「正義の條令」といふ全然新しい法典が發布された。これは貴族の横暴を抑壓するを目的としたものであつた。そして ‘Gonfaloniere della Giustizia’ —「正義の旗頭」—といふ新しい職が設けられて、六人の「ブリオレ」を總

裁せしめた。人民の旗―白地に赤十字―が此者の手に管理され、一千の兵士がその指揮の下に置かれた。この「正義の條令」によつて、貴族は參政權を剝奪された。平民を殺した貴族は斬首され、家は破壊され、財産は沒收されることゝなつた。また貴族は一定の金額を納付するに非ざれば、武器を携へることが許されなかつた。この條例は一二九三年より一三〇六年に亘つて増補され、全體で百十五條となつた。この民主的運動の指導者ヂャノ・デルラ・ベッラ―Giano della Bella―は貴族であつたが、平民に對して多大の同情を抱いてゐた者であつた。この運動の起つた時、ダンテは二十八歳であつた。

以上のゲェルフォ、ギベッリノ兩黨のほか、更にフィレンツェの自殺的闘争の恐怖を増加せしむるべく、新しい争闘が、ダンテの「プリオレ」に選舉された其年に、加へられたのであつた。即ち黒黨、白黨の争ひであつた。十三世紀の終り頃、ビスト

トアの隣市に於て、ゲェルフォ黨のカンチエリエリ―Cancellieri―家に紛争が生じ、'Branchi' (白黨)および'Neri' (黒黨)と稱して二黨に分かれた。その結果ビストイア市自らが此等の二黨に分離して争闘するに至つた。フィレンツェはこれに干涉し、鎮定するつもりで兩黨の首領を捕縛して、自己の市内へ引連れて來た。その結果フィレンツェ市自もまた兩黨の闘争に捲き込まるゝことゝなつた。

たま／＼フィレンツェに敵對せる二豪族があつた。その一つは家柄は古いが貧しいドナティ家であり、他の一つは、家格は劣るも富めるチェルキ家であつた。そこでコルソ・ドナティは黒黨の首領となり、井エロ・デ・チェルキは白黨の首領となつた。斯くて當時フィレンツェを支配してゐたゲェルフォ黨は、黑白兩黨に分離するに至つた。即ち本來は政治的でなかつたところの此等の兩黨が、遂に政治的色彩を帯び、白黨はギベッリノ黨に味方するに至つたのであつた。そして兩黨の争闘が實際的にフィレンツェに始まつたのは、一三〇〇年五月一日、晩春初夏の一夜に起つた喧嘩からであ

つた。即ちピアッツァ・ディ・サンタ・トリニター Piazza di santa Trinità に於て、チルキ家とドナティ家の者等が、婦人達の舞踏を見てゐた時に起つた口論からであつた。それが遂に發展して、恐ろしい物凄い格執となるに至つた（地、六の六四―七二）。そして以上述べたところの紛糾せる政治的低氣壓が、これを機會に爆發して暴風雨となつたのであつた。恰度、斯くの如き切迫せる時、即ち一三〇〇年の六月十五日に、ダンテはフィレンツェの六人の「ブリオリ」の一人に選舉されたのであつた。「凡てのわが禍と、凡てのわが惱みとは、その始まりと起原とを、我が『ブリオリ』としての不幸な選舉に有する。成熟せる智慧に於ては、この職務に自分は適はしくはなかつたが、忠信と年齢とに於ては、自分はこれに適はしくないのであつた。何故なればカムバルディノ役以來十年を経てゐたから」とダンテは云つたといふ（ブルニ）。この職の任期は、既に述べたやうに、二ヶ月といふ短いものであつたが、ダンテおよび同僚の「ブリオリ」達は重大事を處理せねばならなかつた。即ち此年の

四月に三人のフィレンツェ人が、フィレンツェ市の自由に背反し、法王の利益のために陰謀を企てたといふので捕縛し處罰された。法王ボニファキウス八世はマッテオ・ダックアスバルター Matteo d' Aquasparta をフィレンツェに派遣して、黑白兩黨を和解せしめ、陰謀嫌疑の三人を訊問すべく、法王廳に移送せんことを要求せしめた。これに對してダンテは何かその態度を決定する必要に迫られてゐたのであつたが、斷然法王の要求を斥けて、三人の者へ最後の判定を下してしまつた。マッテオは憤然としてフィレンツェに破門の宣告を投げつけて羅馬に歸つた。法王は武力によつてフィレンツェを屈伏せしめんとし、佛蘭西美王の兄弟プロアのシャルルを招くことにした。

ボッカッチオによれば、此時シャルルのフィレンツェに來たることを妨止するため、自黨の首領達が一同會して協議し、いよゝ誰を派遣するかといふ難問題に到着した時、既に述べたやうに、ダンテは傲然として「われ若し行かば誰が止まるか。ま

た我れ若し止まらば、誰が行くか」と云ひ放つたと傳へられる。素より事實であつたといふ確證はないが、ダンテの政治的手腕に對する自覺が示されてゐる。

次にダンテは、黑白兩黨の首領達を追放した。こゝに我々は正義に對するダンテの熱誠を見る。一切の情實、黨の利益、個人的感情に絆さるゝことなく、全くフィレンツェの爲であると信ずるところに従つて彼は斷行した。彼が追放した白黨のうちには、彼の「第一の友」グッド・カヴルカンティがゐた。また黒黨のうちには、妻デエムマの親屬であつたコルソ・ドナティがゐた。後間もなく白黨の追放者達は歸還を許されたが、追放中マラリヤ熱に襲はれたグッド・カヴルカンティは、八月の終り、フィレンツェに歸還後遂に死去してしまつた。

一三〇〇年は、斯く激烈な政争の年であつたが、然し他方に於て、歴史上記憶すべき宗教的事件の起つた年でもあつた。即ち一二九九年の基督降誕節に始まつて一

三〇〇年に互り、加特力教會最初の「禧年」(Giubileo)が舉行された。聖ペテロおよび聖パウロ會堂に參詣する者の罪を赦免すべしと宣言したので、大なる群衆が羅馬に押し寄せた。この時ダンテが羅馬に赴いたといふ證據は残つてゐない。然し地獄篇一八の二八に、カステッロ・サンタンヂェロー—Castello Sant' Angelo—の橋を渡る群衆のことを述べてゐるが、或はこれは目撃した印象を書いたものであつたかも知れない。もし然うであつたとすれば、フィレンツェの紛糾せる政争の環境より脱して、聖堂の崇高にして寂靜な祭壇の前に跪いた時、區々たる政争に、齷齪することの愚昧さと醜劣さを、今更のごとくに感じたであらう。そして「眞の道」が別に存することを鮮かに感得したであらう。この時の巡禮がダンテの心靈生活に大なる印象を與へたこと、ルウテルが後日受けたのに等しかつたであらう。それは兎も角この間に於けるダンテの態度は、まことに敬嘆に價ひする。黨派的争闘に充たされてゐたフィレンツェに於て、彼はその何れの黨派にもくみせず。黨派の利害の上に、

市の安寧と自由を置いた。彼は法王や佛蘭西などの援助を受くるが如きことには絶対に反対した。そして人氣や友情にさへもまさつて、正義と平和と秩序とを重んじ、公的安寧のためには、個人的利害を顧みなかつた。自黨の利害をも考量しなかつた。

一三〇一年四月十三日、將來の「ブリオリ」選舉に關する手續の方法についての投票にダンテはあづかつてゐる。四月二十八日にはサン・プロコロ—San Procolo—の市街改修工事の監督に任命された。この改修の目的は「一般民衆が貴族や有力者達の妨害を受くることなしに、何時にても欲する時に、『ブリオリ』達および『正義の旗頭』に接近し得んがためであつた」。六月十九日、百人會議につらなり、シチリア島に於ける戦争のため百人の兵を法王軍に援兵として送るべきや否やの問題に對し、「ダンテ・アリギエリは、法王を援助することなきことは一切してはならぬ」と勸告

した」—*Dante Alagherij consultit quod de servito faciendo domino Pape nichil fiat?*—
更に九月十三日と二十日とに投票してゐる。九月二十八日に「正義の條令」と「人民の法令」との保存について投票してゐるが、これはダンテの投票について記録に残れる最後のものである。

さて當時フイレンツェの政治界に活躍してゐたディノ・コムパニ—Dino Compagni—はそが年代記のうちに、フイレンツェとボロニアとの白黨が聯合の使節を羅馬法王廳に派遣し、シャルル王の伊太利亞に來たらんことを中止するやうに努力したと書いてゐる。「使節達が羅馬に到着するや、法王は彼等のみを己が室に迎へ、そして秘かに彼等にむかひ『何故に君達は斯く頑固であるのか。俺のまへに自ら卑れよ。眞實を云へば、君達の平和を促進すること以外に他意がないのである。君達のうち二人が歸れ、そして俺の意志に人民を服従せしめることが出來れば、俺は二人を祝福する

ぞ』と云つた』といふ。歸つた二人はマソ・ディ・ルッヂエリノ・ミネルベッティおよび
コラツィオ—Maso di Ruggierino Minerbetti, Corazzo—といふ者であつたが、ダンテ
は羅馬に抑留された。何故に抑留されたのか不明であるが、云ふまでもなく、トス
カナを法王の勢力範圍に置かんとする政策に對する巨敵と、ダンテを見たからであ
らう。ダンテはまた羅馬滞在の三ヶ月間に、法王廳の腐敗と墮落とを目撃して、憤
慨の念に燃やされたであらう。天國篇一七の四八—五一に於て、カッチアグダがダ
ンテにむかつて云つてゐる——

汝はフィレンツェを去らねばならぬ。

日々基督の買賣される彼處(羅馬)にて

これを思ふ彼が、これを願ひ

既に企てたので、間もなく果たされるであらう。

一三〇一年に、フロアのシャルルが、一千二百人の兵を率ゐてフィレンツェに入つ
て來た。そして公然黒黨と提携した。騷擾に乗じてコルソ・ドナティが歸つて來て、
牢獄を解放し、市内を掠奪せしめた。シャルルは黒黨にフィレンツェの政權を渡した
後、羅馬に赴き、金錢を法王に要求した。すると法王は「なんちを黄金の泉のなか
へ入れたではないか」とシャルルに答へたとデイノが記してゐる。引續き大々的な沒
收が始まつた。カンテ・デ・ガブリエリ—Cante de' Gabrielli—が「ボデスタ」とな
り、數百人の白黨を追放した。一三〇二年一月二十七日、ダンテは他の四人のものと
共に追放を宣告された。罪名は、詐偽、瀆職、官金費消、および法王とその代表達に
對し、フロアのシャルルに對し、フィレンツェとグェルフ黨に對する反逆といふので
あつた。そして重き罰金を課し、費消せる金額を三日以内に賠償すべし、然らざれ
ば財産を沒收すること、また二ケ年間追放し、而して官金費消者として永久フィレン

ツェの一切の公職に就く権利を剝奪すると云ふのであつた。ダンテはフィレンツェに此時ゐなかつたので、無論法廷に出づることも出来ず、たとへ出づることが出来たとしても、それは進んで殺されに行くのに等しかつた。ダンテが以上に列記されたやうな罪名に償ひしないのは明白である。彼と同時代に生存したギラニは、ダンテがたゞ白黨であつたがゆゑに、「他に何の罪科もないのに」追放されたと云つてゐる。

更に六週間の後、同年三月十日に、此等の四人と他の十人の者等に對する第二の宣告が發せられた。彼等にして若しフィレンツェ共和市の勢力圏内に入るならば、生きながらにして火刑に處す——*igne comburatur sic quod moriatur*——といふのであつた。斯くしてダンテは遂に、熱烈に愛してゐたフィレンツェより追放されて、永久の流竄者となり、窮乏のうち、諸侯の宮廷より宮廷へと漂浪する身となつてしまつた。

二 流 竄

ダンテの生涯を深め高めたものが二つあつた。そして其いづれもが失敗の形に於てゞあつた。偉大なる恩寵を含める失敗の外形に於てゞあつた。即ちベアトリッチェの若き死と、政治的追放とであつた。ベアトリッチェなく、彼女の死がなかつたならば、彼の靈魂は斯く高くは擧げられなかつたであらう。十九年の流竄がなかつたならば、彼の靈魂は斯くは深められなかつたであらう。この二大失敗乃至不幸がなかつたならば、至高至深の實在に面と面と對し得なかつたであらう。ベアトリッチェはダンテを神の方に向けし星であり、流竄は彼を人生の虛妄より救ひ出したところの、殘酷であつて而も慈悲ぶかき力であつた。ベアトリッチェはダンテにとりて、謂はゞ、敬虔なる加特力教徒に於ける教會のごとき、また嚴格なる新教徒に於ける聖書のご

とき位置を占め、世界を照らす「眞の光」——神——より發する光であつた。流竄はダ
ンテにとりて、アッシジの聖フランシスコに於ける聖貧のごとく、たゞに富、奢侈、
物質的の所有よりの離脱のみでなく、靈的自由であつた。それは彼を世に縛つてゐた
絆より放ち、彼の靈魂をより劣れる願望より自由にした。ペアトリチエと流竄とは、
いづれも、謂はば、ダンテをして人生の眞諦に徹底せしめ、以つて眞に價値あるもの
と、價値なきものを、最も力づよく、人類に啓示せしめんがために、彼に與へられた
ものであつた。彼は單にフィレンツェの成功せる政治家として終るべく餘りに偉大で
あつたのである。彼の運命は世界的詩人たることのものであつた。彼の使命は永遠の
豫言者たることのものであつた。それがために彼は苦惱をその残滓までも啜らねば
ならなかつたのである。現世的幸福安寧への道は、彼に許されなかつたところ。詩聖
ギルギリウスが云つてゐるやうに、彼は、*altro viaggio*、「ほかの道」を取らねば
ならなかつた（地、一〇九一）。即ち人間の靈魂の一切の状態と行爲とを蒐集分類し、

これを只に祖國フィレンツェのみでなく、全伊太利亞、全歐洲、全世界の人類の教育
のために、凡ゆる性格の宏大なる畫館をつくること、これが彼の天職であつた。

この道は彼にとりて道がに辛きものであつた。正しく、*via dolorosa*、「苦惱の
道」であつた。善し悪しともに、凡そ自己に關することは一切沈黙し、決して女々し
く世間にむかつて愁訴することなく、「内心の密室に於て」泣けと云つたダンテも、
「……傷つけられし者に不當にも屢歸せしめらるる運命の傷を、意ならずも曝露し
つゝ、私は、巡禮のごとく、殆んど乞食のごとく、この語（伊太利亞語）の擴がる殆
んど凡ての土地を行きめぐつた。まことに私は帆なく舵なく、慘ましき貧窮より吹
く乾ける風のまに／＼、さまざまな港と灣とに運ばるゝ船であつた……」と云つてゐ
る。また天國篇一七の五八―六〇に彼の祖先カッチアグダはダンテにむかつて――

Tu proverai si come sa di sale

Lo pane altrui, e com'è duro calle

Lo scendere e il salir per l'altrui scale.

他人の麩麩のいかに味鹹しほからく

他人の階きざはしの下り上りの如何に辛つらき

徑なるかを汝は閱し盡すであらう

と云つてゐる。然しながらダンテは決して運命の手に翻弄さるゝ受働的な傀儡でなかつた。「風に吹かれて頂を嘗て動かさぬ堅き櫓のやうに」立つた（煉、五の一四、一五）。内心に疚しきところなき限り、如何なる苦難も彼を覆すに由なかつた。地獄篇一五の九一―九六に於て、嘗て感化を受けたことのあるブルネット・ラティニにむかつて云つてゐる――

Tanto vogl'io che vi sia manifesto,

Par che mia coscienza non mi garrà,

Che alla fortuna, come vuol, son presto.

.....

Però giri fortuna la sua rota,

Come le piace, e il villan la sua marra.

ただ汝に示したい一事は

わが良心の私を責めざるかぎり

いかなる運命をも私が覺悟してゐることである。

.....

されば運命に好むがまゝ、その輪をめぐらせ
農夫には其鶴嘴じしほしを振らしめよ。

また彼は天國篇一七の二三、四に――

.....avvenga ch' io mi senta

Ben tetragono ai colpi di ventura.

.....しかし私は運命に對し

自ら全く四角なるを感じる。

と云つてゐる。四面體は如何やうに放擲さるゝも安定する。心に疚しきところなき
人は、何時にても、何處にても、幸運と悲運とを、恰も正方形のごとくに耐へし

ぶ（アリストテレス「倫理」一の一〇）。ダンテと雖も素より人間である。流竄といふ不當の運命に對して、何とも云ひがたき憤激をこゝろに感じはしたが、然しそれがために徒らに焦燥するやうなことがなかつた。ストア派の哲人の態度をもつて彼は云ふ「恰も海が魚に於けるがごとく、世界を祖國とする我等は、たとへ齒の生へるまへにアルノの水を飲み、またフィレンツェをいたく愛して、その抱ける愛のために、不當にも流竄にあつてゐるとは云へ、我等の判断を感情に置かずして、寧ろ理性に置く」と（俗、一の六の一七一二三）。

さてダンテの漂浪の跡をたゞることゝに於て我等も漂浪者たらざるを得ない。彼が何日何處をさすらつたか、詳しいことが分からぬ。この追放者の旅程については、何人も、追放者みづからも、記録するに足るとは如何して思つたであらう。ダンテが有名となつた時は、既に遅く、傳説が事實と混合せしめられてしまつた。北部伊太

利亞の或る地方に於ては、彼についての傳説のない村邑とては一つもないほどであるといふ。故にダンテの辿りし足跡を精確に追ふことは不可能であるが、然し大體の輪廓だけは知ることが出来る。而してダンテの眞の生涯は、外部的よりも、寧ろ彼の靈魂のうちに起つた思想と情感とに存するのであつて、それは彼の「神曲」のうち、遺憾なく披瀝されてゐる。

「ダンテはあの没落を聞いた時、直ちに、使節として滞在してゐた羅馬を去り、全速力にて旅し、シエナに來た」とレオナルド・ブルニは書いてゐる。シエナに於て自己の運命について一層詳しく知り、全くフィレンツェへの歸還の見込のないのを見、他の追放者達と運命を共にしようと思ひ決心した。まづ第一に、ゴルゴンツァー Gorgonzara に於て開かれた會合に彼等はつらなつた。これに集つた者等の大部分は貴族的ギベリノ黨であつた。こゝに於て彼等は武力によつてフィレンツェを占領しよ

うと計畫し、アレツツォを本據となし、アレツサンドロ・ダ・ロメナー Alessandro da Romagna 伯を首領とし十二人の顧問を置いた。この顧問のうちにダンテは加へられた。そして一二三〇二年六月八月、フィレンツェを去ること二十哩ほどの聖ゴデンツォ San Godenzo の會堂に於て、いよゝゝフィレンツェ攻撃を企てた。

一二三〇四年 法王ベネディクトゥス十一世は、オステイアおよびヴェルトゥリの監督ニコロ・ダ・プラトー Nicolo da Prato を、トスカナ、ロマニヤ地方の鎮定者に任命した。ニコロは此資格をもつて、三月十日にフィレンツェに到着した。この頃ダンテが追放者を代表して彼に返書として贈つたと稱せらるる書翰があるが、一般にダンテの書いたものとせられる。そのうちに、「祖國の醫やさるゝことは、我等の喘ぎ求めるところであつて、これを渴望すること、まことに夢に見るほどである」と云ひ、また「我等が内亂に身を投じ……我等の劍と槍とが紅血に染めらるゝのは」たゞん

イレンツェの平和と自由のために外ならぬ旨を力説し、若しニコロの努力によつて開停が成立すれば「我等は平和と正義を慕ふ者として、我等の劔を放擲する」と云つてゐる。然しニコロの使命は遂に成功せずして、彼は六月の初にフィレンツェを去つてしまつた。

一三〇四年七月二十日、追放者達は遂にフィレンツェ攻撃を開始した。そして彼等の軍勢の一部分は、門を突破し、旗を聖約翰會堂サンジョウウラニユの構内まで運び行つた程成功した。然し市を占領することが出来なかつた。この攻撃軍のうちにはベトッラルカの父も加はつてゐたが、アレツォに歸還し、己が子の生れたのが、フィレンツェ攻撃失敗の當日であるのを知つた。ダンテはこの祖國攻撃には參加したとは思へない。既に彼は、一般追放者達の愚昧下劣なのに愛想をつかして、斷然彼等より離れ去つたのである。天國篇一七の六一—六九に、カッチアグダはダンテにむかつて云つてゐる——

また汝の肩をいと重く壓するは

汝が相携へてこの谿(流竄)に陥るべし

邪惡魯鈍な伴侶等であらう。

忘恩を極め狂亂兇惡をつくして彼等は

汝に逆ふであらう。しかし後間もなく

これが爲、汝にあらず、彼等が頼頼こゝろがみを頼めるであらう。

彼等の行動が彼等の獸性を曝露するであらう。

されば一身一黨たることが

いかに汝に佳よはしいことであらう。

まことに「一身一黨たること」—*parte per te stesso*—これ彼の永遠の性格でもあり運

命でもあつた。疑ひもなく追放者達は、ダンテの傲慢な、非妥協的な、一徹なのに手古摺り、彼の離れ去るのを恐らく厭はしくは思はなかつたであらう。

フィレンツェ攻撃に先んじて多分死去したと思はれるアレッサンドロ・ダ・ロメナ哀悼の書翰を、その甥達にあたるオベルト伯およびグッド・ダ・ロメナ宛にダンテはあつたと云はれるが、この書翰は一般に承認されてゐない。その末節に、埋葬の式に列席し得ざる旨を記し、「参列しないのは冷淡もしくは忘恩からでなく、追放のために思ひがけなくも被りし窮乏のためである。窮乏は、復讐的狂暴のごとく、馬と具束とを奪ひて、私をその獄裡に投じ、假借することなく私を苦しめつゞける。そして私は全力をつくして脱却しようと努めるが、今までのところ窮乏は私を制してゐる」と記されてある。恐らくダンテは己が窮乏を書くことをしなかつたと思はれるが、然し一般の追放者達とともに、この種の辛酸を早くより嘗めたに相違ない。

ダンテの最初の避難處は、エロナーVerona—のバルトロメオ・デラ・スカラーBar-
tolonneo della Scala—の宮廷であつた。天國篇一七の七〇—八一に於て、カッチア
グダは彼の「ことを、il gran Lombardo」——「偉大なるロムバルディア人」と稱してゐ
る——

かの偉大なるロムバルディア人の感愾が

汝の初めの隠家、初めの宿となるであらう。

彼は汝に對していとも慈悲ぶかき心を抱き

爲すこと願ふこと、他の人々の間にてはいと緩さも

汝等ふたりの間には最先に爲されるであらう。

.....

そしてダンテは、此時、バルトロメオの末弟カン・グランデ・デラ・スカラー（*Grande della Scala*）を見た。彼は漸く九才にして「若年ゆゑに民はまだ彼を識らないが、後ゼロナの領主となり、妻美はしく勇敢なる人物として勢力を揮ふべきものであつた。さてこの頃ダンテは「善行と正しい行爲とにより、政府の自發的行動によつて、フィレンツェ歸還の恩赦を獲ようとなつた。この目的の貫徹に専心して、彼は個々の有力なる市民、また一般人民へあてゝ、頻りに書翰を書いた……」とブルニは記してゐる。

一三〇五年頃、ダンテが或るひとりのビストイア人の追放者に寄せたといふ書翰がある。茲にいふビストイア人といふのは、詩友であつて同じく故郷より追放されてゐたチノ・ダ・ビストイアであつたことが確かである。この書翰は是迄は一三〇七

年以後のものと考えられてゐたが、最近の研究では、一三〇五年もしくは一三〇六年とせられる。—*Toynbee: Dantis Epistolae, pp. 20, 21.* の書翰は筆者のことを '*Florentinus exul immeritus*'—「不當にも追放されしフィレンツェ人」とあつて、確かにダンテの書いたものとせられる。靈魂が情熱より情熱へと轉移し得るかとのチノ・ダ・ビストイアの質問に肯定的に答へたもので、結尾に「親愛の兄弟よ、努めてネメシスの箭に對し、忍耐をもつて自ら鑑はんことを汝に勸告する……そして殊に『汝らもし世のものならば、世は己がものを愛するならん』といふ言葉を汝の記憶より去らしむる勿れ」と云つてゐる。

さてダンテは、一三〇六年八月には、北部伊太利亞のバドワ—*Padova*—にゐたと思はる。同年八月二十七日附のバドワの一文書の證人として '*dantino q' alligerii de Florentia et nunc stat paduae*'—「フィレンツェ人にして今はバドワにゐるダンテ・アリ

ギェリ」と記されてある。然しダンテの死後、他の文書に「Dantinus」といふ名が現れてゐるので、前記文書にある名が、確かに我が詩聖ダンテであると斷言することが出来ない。

同年秋には、トスカナ州の西北隅のルニヂアナ—Lunigiana—に赴き、マラスピナ—Malaspina—家に寄寓した。これは同年十月六日附の文書によりて知られる。此間にルニ—Luni—の監督に媾和締結のため使節としてダンテは派遣され、その使命を全うした。彼はマラスピナ家の厚意を感謝してゐた。この「一族は財布と劍の稱讃を汚してはゐない……慣ひと資性どが、ひとり正しく歩みて悪しき道を蔑ずむといふ特權を」この一家に與へたと云つてゐる（煉、八の二二八—二三二）。ダンテのマラスピナ滞在期間は不明であるが、多分一三〇七年の夏を越えなかつたであらう。このマラスピナ家の第三代モロエ、ロにダンテは「煉獄篇」を献じたといふ説もあつた。

後一三〇九年前後に、多分カゼンティノ—Casentino—地方より、このモロエ、ロに寄せたダンテの書翰がある。或る學者はダンテの書いたものでないと主張するが、一般に彼の手に成つたものとして承認されてゐる。その書翰のうちに、ダンテは先づマラスピナ家の款待を感謝する旨をしるし、次でアルノの流のほとりをさすらつた時に「天より電光のやうに、ひとりの女があらはれた」。ダンテはこの美に捉へられた。そして「愛」は「故國より追放され、長き流竄の、ちに故國に歸つた暴君のやうに、暴れ猛つて」ダンテを捉へた。かくて「女性に對して、また女性についての歌より、自らを超然たらしめたいといふ尊い決心を殺し、或は追放し、或は束縛した。そして天と地とのことを思ひめぐらすのを常とした我が不斷の瞑想を、嫌疑者として、無情にも追放してしまつた。かくて最後に我が靈魂をして決して再び「愛」に對して反抗せしめぬやう、わが自由意志を束縛してしまつた」と書いてゐる。そして結尾に一篇の「カンツォネ」を附してゐる。

さてマラスピナ家を去つてより、一三〇八年には、ダンテは多分、ロマニアのギベリノ黨の根據地であつたフォッリ—Foligno—に赴いたらしい。この市の史家フラギオピオンド—Flavio Brondo—（一四六三年死）は、ダンテが筆記せしめた數通の書翰が、その頃保存されてゐたと云つてゐる。ダンテが一度フォッリに行つたことがあつたことは、煉獄篇二四の三一から推測される。更にそれより彼はルッカー—Lucca—へ行つたことが分かる（煉、二四の四五）。

ボッカッチオがベトッラルカに寄せた拉句語の詩のうち、ダンテのことを述べて *Pariseo dudum seruque Brianos* と書いてをり、またギラニも同じやうなことを記してゐるので、ダンテは流竄中に、ボロニア大學に遊び、次でバリより、英國に渡つたと云ひ、更に十五世紀の初めにデオヴンニ—Giovanni Serravalle—はダンテがオクスフォード大學に學んだことを詳しく記してゐるが、既に述べたやうに、他に確實なる證據が存してゐない。

この數年間のダンテの漂浪のあとを辿ることが困難であるが、皇帝ハインリッヒ七世の伊太利亞南征が、ダンテの姿を我等の眼に現はして呉れる。ルクセンブルグ侯ハインリッヒは一三〇八年十一月二十七日にフランクフルトにて、獨逸皇帝に選舉され、一三〇九年一月六日にエイ・ラ・シャペル—Aix-la-Chapelle—にて戴冠した。一月二十六日、ハインリッヒよりの使節に答へて、法王クレメンス五世は回書を發して皇帝の選舉を承認し、二年以内に羅馬の聖ペテロ會堂にて戴冠式を行ふべきことを誓つた。一三二〇年五月にハインリッヒは伊太利亞の主要なる諸都市—フィレンツェも其中にあつた—へ使節を派遣して、皇帝としての戴冠のため伊太利亞に南下すべきことを告達した。その年の九月一日に法王は更に第二の回書を發し、皇帝として

ハインリッヒを迎へんことを承諾した。混亂してゐた伊太利亞は、皇帝擁護のギベリノ黨のみならず、法王擁護のゲルファ黨の大部分も、ハインリッヒの南下を歓迎した。長く苦しみし紛亂が、皇帝の力によつて終結せしめられ、平和と正義とが回復せられんことを願つた。ダンテの希望は新しく燃え始めた。既に獨逸皇帝は五十年以上も伊太利亞へ來らずして「帝國の花園」を顧みなかつた。ハブスブルグ家のルドルフ（一二七三—九一）と其後繼者達とは、自國と自分達との事のみ没頭してゐた。然るに今や「正しく、宗教的で、勇武であつた」ハインリッヒが皇帝に選舉されて、皇帝權を確立し、狂亂の伊太利亞を鎮定しようとする！ダンテは非常に喜んだ。ハインリッヒにして一度羅馬に來つて戴冠せば、世界的平和が直ちに實現し、伊太利亞の紛争も消滅するであらうと考へた。彼は殆んど宗教的熱誠をもつて皇帝の南下を待ちまうけてゐた。

いよいよ一三三〇年の十月十日に、ハインリッヒは南下して來た。伊太利亞の諸都

市は使節を派遣して彼を歓迎した。しかるにフィレンツェのみは派遣しなかつた。數日の後皇帝はアルプスを越えた。ダンテが、伊太利亞の諸侯と人民とに寄する書翰を認めたのは、この前後であつたであらう。この書翰は、*Dantes Alagherii Florentinus et exul immeritus* — 「不當にも追放されしフィレンツェ人ダンテ・アリギエリ」 — として、ダンテ自ら名を記した三つの書翰のうちの一つである。

‘*Eece nunc tempus acceptabile*’ — 「見よ、今は恵みの時なり」といふ新約聖書コリント後書第六章二節の言葉をもつて、ダンテは此書翰を始めてゐる。「慰藉と平和の徴候が茲に起る。蓋し新しき日が明け初め、東方は黎明を示し、かくて今しも、我等の長さ苦難の闇が消散しつゝある。既に東方の微風は爽かになり、天の面は蕃薇いろを呈し、そして人民の希望を、吉兆の靜謐にて確める。而して荒野に於て長さ夜のあひだ徹宵した我等もまた久しく待ち焦がれし歡喜を見るであらう。蓋し平安の太陽は高きにあらはれ、正義は……再び復活せんとする。飢え渴く者は皆その輝

きの光に充たされるであらう。そして不義に喜ぶ者は、その輝きの面前に耻ぢしめられるであらう。蓋しユダの族の強き獅子は、俘囚となれる群衆の悲嘆に動かされて、更にひとりのモオセを起たしめた。この者はこの民を埃及人等の抑壓より救ひ出し、乳と蜜との流るゝ地に導くであらう。

この故に、伊太利亞よ、歡べ、今やなんぢは、サラセン人等にすらも、憐まるゝが如きものでなくなつた。なんぢの新郎、諸國民の慰藉にして、また汝の民の光榮、神の選び給へる者、アウグストゥスにしてカエサルなる、實にいと仁慈なるハインリッヒが婚筵へと馳せ來たらんとしてゐるので、汝は間もなく全世界の羨望となるであらう。いと美はしきものよ、なんぢの涙を乾かし、また汝の涙痕を拭ひ去れ。不信の者等の牢獄より汝を救ひ出し、劍の尖端にて不義を爲す者等を撃ちて、これを滅ぼすであらう。そして彼の葡萄酒は、收穫の時に至つて正義の果を結ぶところの他の農夫達に貸し與へられるであらう。しかしダンテは殆んど彼の希望が實現し、勝

利が確實と見えたる此時に於て、ものが政治的反對黨に對して、寛大な赦す心を抱いてゐた。彼は續けていふ「然し其時かれは何人をも假借しないであらうか。否、彼はカエサルであつて、彼の主權は憐憫の源泉より出づるがゆゑに、彼は彼の慈悲を懇願する者をすべて赦すであらう……」。

さてハインリッヒは大いに歓迎されて、一三二一年一月にミラノに於て、伊太利亞の王として鐵冠を戴いた。この時ダンテは親しく皇帝に謁した。しかし人民のこの歓迎は皮層なものであつた。幻滅の悲哀を直ちに味はねばならなかつた。窮乏のため課した重税ゆゑに、ロムバルディアの多くの都市に反亂が起つた。ブレシアも反亂した。ハインリッヒは羅馬に邁進するかはりに、ブレシアの包圍に數箇月を費やして致命的失策をした。そしてフィレンツェ市の黒黨の提供した黄金と軍隊とのために、バルマ、レッヂオ、レモナに於けるハインリッヒの勢力が顛覆せしめられた。フィレン

ツェは大いに準備して、斷乎として皇帝に反対し、自ら皇帝の敵の首領となつた。ダ
ンテは失望し、また憤り、到底沈黙してゐることが出来なかつた。三月三十一日附
にて、フィレンツェ人に寄する書翰を認めた。「不當にも追放されたるフィレンツェ人ダ
ンテ・アリギエリ、市内の最も邪惡なるフィレンツェ人に寄す」と冒頭して、先づ静か
な雄辯な言葉で、神聖羅馬帝國の世界統治の使命について述べ、次いで伊太利亞の
亂狀について記し、進んで熱心な言葉にて、神の使者であるところの皇帝に反抗し
て立つフィレンツェ市の不遜な傲慢を叱責し、フィレンツェ市に迫つてゐる破滅と荒敗
とに對しての威嚇をもつて終つてゐる。この書翰はアルノの水源地より發送したも
のであつた。

しかしダンテのこの勸告もしくは威嚇も遂に何の効果なく、反抗はいよゝ／＼募り
ゆき、ハインリッヒの行進は遅延した。この遅延をもどかしがりてダンテは、一三一

一年の四月十七日、ハインリッヒ自身に宛て、一通の豫言者的な書翰を認めた。「最も
光榮ある、而して最も幸運なる征服者、また唯ひとりの主君、神の攝理によりて羅
馬人の王であり、アウグストゥスでさへある、主君ハインリッヒに、その最も忠信なる
僕等、即ち不當にも追放されしフィレンツェ人ダンテ・アリギエリ、および平和を願
ふ到る處の凡てのトスカナ人、その足のまへにて、地に接吻をなす」と冒頭し、聖
書の句を引用し、或は歴史上の例を擧げて、遲疑することなく、神に信頼して起ち、
己れに反対するゴリアテを殺せよ、されば「ペリシテ人は逃げてイストラエルは救は
れるであらう……今われらは、いとも聖きエルサレムを思ひいで、流竄のうちにあ
りて哭けども、その時には苦難の悲惨を歡喜をもつて偲ぶであらう」と書いてゐる。
この手紙と前後してダンテが皇后マルガリタに贈つたと稱せらるる三通の書翰があ
るが、確かにダンテが書いたものであらうといふ説が強い—Moore: Studies in Dante.
IV. pp. 256—75, 287. その中に、唯ひとりの主權者によつて世界は統治せらるべし—

といふダメンテ平生の信念が記されてをり、またこの希望の實現さるる曙光を認めてゐる旨が書いてある。

この間に、ハインリッヒはフィレンツェ市に對し、使節をピサに派遣せよと要求したが、それは只「フィレンツェ人は決して如何なる君主に向かつても、その角を垂れはしない」といふ返答を得るに過ぎなかつた。皇帝は最善を盡した。しかし凡てが空しかつた。斯くも赫々たる期待をもつて幕の開かれた戯曲が、悲戲的結末へと前進しつゝあつたのである。伊太利亞はいよゝ紛亂して前よりも甚しく。一難また一難。五月には皇帝の兄弟がブレッシア包圍中に死去し、皇后マルガリター「聖くして善き女性」が、デユノアに逝去した。これに反して敵の勢力はますます増大した。しかしハインリッヒは、兎に角一三二二年五月に羅馬に入ることが出来たが、市の半数は敵軍の手にあつて、市は流血の場面と化した。聖ペテロ會堂に入ることが出来

なかつたので、ハインリッヒは、心ならずも、聖ラテラノ會堂に於て戴冠した。兵力は減じ、勢力は衰へ、皇帝自ら意氣沮喪して、トスカナに退き、フィレンツェを包圍したが、不成功に終つた。數ヶ月に亘りて無益な戦ひを繼續するに過ぎなかつた。一三二三年の夏、兵を狩りあつめて、南下し、ナポリ王を攻めた。しかし中途にて熱病にかゝり、八月二十四日に、遂にブオンコンヴェントーBuonconventoに於て死去してしまつた。ハインリッヒの死と共に、伊太利亞の統一と平和との希望も死滅した。崇高な目的と勇氣をもつて企てられた皇帝の仕事は、全然失敗してしまつた。ダメンテは天國篇三〇の一三七に「彼は伊太利亞の未だ備へせざるに、これを直くせんために」來たのであると云つてゐる。伊太利亞は再び暗澹たる黒雲に蔽はれ、ダメンテにとりて苦き杯が溢れた。武力によりてフィレンツェへ歸還せんとの希望が永久に封じられてしまつた。

ハインリッヒが伊太利亞に滞在してゐた二ヶ年のあひだ、ダンテは何處に、何をしてゐたか、不明である。ただ一つ、一三二一年の夏フィレンツのグェルフォ黨は、皇帝の攻撃に備へんがために、追放中にある市民達を召還した。然し九月二日發布の大赦の恩典より除外されたものが甚だ多く、其數が一千人以上に及んだといふ。これを以つて見るも、追放者の數が如何に夥しかつたかが分かる。除外されしものゝうちにダンテの名があつた。

ハインリッヒの死後八ヶ月にして、一三二四年四月二十日に、法王クレメンヌ五世も死去した。法王廳を羅馬より佛蘭西のアギニオンへ移したのは彼であつた。故に彼の死によつて、或は法王廳が再び羅馬に復歸さるる希望が些かながらあつた。アギニオンより約十六哩へだつたカルペントラスーCarpentras—に二十四人の「カルディナレ」達が集合して、後任法王の選定を協議した。その中伊太利亞人は六人の

みで、他は皆佛蘭西人であつた。そこで意見が一致せず、數ヶ月のあひだ、何等決定するどころなく、教會および伊太利亞の運命は甚だ不安なものであつた。この重大なる問題が、徒らに主教達の利己、嫉妬のために、遷延さるゝのを見て、ダンテは堪まらず、遂に一三二四年の五月或は六月、一書を認めて、伊太利亞の「カルディナレ」達におくつた。そして假令少數であつても、一致して、法王廳回復のため努力せよと激勵した。しかし是れもまた無益であつた。佛蘭西黨は前法王クレメンヌの甥であるベルトゥラン・ド・ゴッオーBertrand de Got—を首領として、武器を携へ、選定會議場へ闖入し、「伊太利亞のカルディナレ等を殺せよ」と叫び、遂に彼等を放逐してしまつた。かくて二年以上法王位は空であつたが、一三二六年八月七日に、アギニオンの大監督が法王に選舉されて、ヨハンネス二十二世と稱した。

さて皇帝ハインリッヒ七世の死は、ダンテの生涯に決定的な時期を劃した。彼が皇

帝を熱烈に擁護したことは、彼自らに向つて永久にフィレンツェの門を封ぜしめることであつた。ハインリッヒの死によつて、平和にて秩序ある世界といふダンテの夢は消えてしまつた。法王の威力による希望も薄らぎゆくのみであつた。それは只、ダンテにとりては、貪婪な狼であり、人間を貪りくらふ者であつて、決して指導者でなくなつた。地獄篇一の五五—五七に

E quale è puei che valentieri acquista,

E giugne il tempo che perder lo face,

Che in tutt' i suoi pensier piange e s' attrista :

欣然として獲るも、時いたつて

これを失ひ、思ひをつくして

泣き悲しむ人がある。

と云つてゐるが、これ正しく此頃のダンテの心情であつたであらう。斯くのごとき幻滅の時、深き靈魂の人は、悲觀主義にか或は神に向く。今や彼は、如何にして自己の生涯を全然の破滅より救ふべきかといふ大問題に面した。生涯の一切の條件が、絶望的に非である時に、尙ほ勝利的に活き得べき道が人間にないであらうか。悲觀に傾くべく、ダンテの精神は餘りに積極的であつた。何處の方面に於てか、彼は力を見出さねばならなかつた。生活に意義と價値とを與へる根據を發見せねばならなかつた。この世界の與へ得なかつた平安を獲んとして、彼は神に向かつた。法王も皇帝も、この世の「暗き林」より「幸福の道」へ導き得なかつたので、彼は遂に「裏なる光」へと沈潜した。樂聖ベトオフンは自己にむかひ「あゝベトオフンよ、汝の求めてゐる幸福はこの地上にはない」と云つてゐたと云ふが、ダンテに於ても

然うであつた。彼の生涯は幻滅より幻滅へのそれであつた。然しながらそれは彼の心を虚妄より脱せしめ、過ぎゆくものと常住のものとの相違を彼に教へた。外部の世界より内部の世界へ轉回せしめた。瑣々たる、一時的なる物質的の利害の念より彼を引き上げて、廣大悠久なる精神的利害に參ぜしめ、孤立せる個人たることを止めて、人類同胞の一員たらしめた。彼の精神は遂に眼に見ゆる世界を飛び越えた。聖フランソア・ド・サル—St. François de Sales—は云つた——

Notre coeur est plus grand que tout le monde.

われらの心情は全世界よりも大である。

と。以後ダンテは自由に靈魂の高所より人生を瞰下して、これを批判し、激勵し、

叱咤し、また同情し、救済の道を教ふるものとなつた。狂亂はフィレンツェのみでなく、全伊太利亞にあるのを見た。また政治的紛亂の原因が單に外部の狂亂によらずして、衷なる靈魂の破綻によるのを識つた。否、他人の問題でない。自己内心のうちには於ける轉回の必要を感得した。皇帝と法王との、諸侯の、諸都市の争鬭の戯曲は、自己の靈魂裡の深處に於けるそれに比しては、まことに陰影のたはむれに過ぎなかつた。この危機に際し、あのが過去の生涯を省みて——

Nel mezzo del cammin di nostra vita

Mi ritrovai per selva oscura,

Che la diritta via era smarrita.

人生の旅路なかばに

正しき道をうしなひ、わが身の
暗き林のうちにゐるのを見た

と叫ばざるを得なかつた——地、一の一—三。また自らを破船に遇ひし人に比してゐる——

かくて呼吸もくるしく海より

濱邊に出た人が振りかへつて

危ふかりし水を洶めるやうに

尙も逃げゆくわが心は

嘗て人の活きて去りしことなき

逕を眺めんとて後にむいた。

(地、一の一—二七)。

單なる詩、學藝、藝術、而して遂に政治すらも、今の彼の心境によつては、餘りなまやさしいものであつた。うはすべりなものであつた。世界の禍ひの深處に行き、その恐怖と物凄き刑罰との背後に、神の正義と愛との存するを知るまでは、安んずることが出来なかつた。そして彼は最後にこの偉大なる宗教的體驗を確實に獲得したのであつた。天國篇一一の一—一二にいふ——

467

O insensata cura dei mortali,

Quanto son difettivi sillogismi

Quei che ti fanno in basso batter l' ali ?

Chi dietro a iura, e chi ad aforismi

466

Sen giva, e chi seguendo sacerdozio,

E Chi regnar per forza o per sofismi,

E chi rubare, e chi civil negozio,

Chi nel diletto della carne involto,

S' affaticava, e chi si dava all' ozio;

Quando da tutte queste cose sciolto,

Con Beatrice m' era suso in cielo

Cotanto gloriosamente accolto.

あゝ人間の麻痺せる配慮よ

なんぢの翼を搏ちて垂れしむる

シロザス推論のいかに缺くるかよ

或るものは法律を、或る者は格言を

追跡し或る者は僧職を追求し

或る者は暴力と詭辯とにて支配し

或る者は掠奪し、或る者は公務に關り

或る者は肉の快樂に耽つて疲れ

或る者は安逸に身を持ち碎してゐた。

斯かる時に一切此等のものより解かれて

私はベアトリチェとともに天に到り

かく榮光の裡に迎へられたのである。

一三一三年以後、ダンテは神曲の作成に全力を傾注したと見える。ボツカッチオは次のやうなことを述べてゐる。嘗てダンテの家が掠奪に遇つた時に彼の所有物を蔽す

ために入れた匣のなかより、或る人が一三〇七年頃、未完成の詩の七曲を発見した。その人は非常に驚嘆して此をディノ・ディ・ラムベルトゥッチオー—Dino di Lambertuccio—に見せたが、ディノはこれはダンテの作だと云つた。その頃ダンテはルニヂアナのマラスピナ侯家にゐたので、この詩稿を送り届け、斯くも崇高な發端を、これに適はしい結末なしに放棄せざらんことを勸告した。するとダンテは答へて「わが所有物か大方荒らされた時、此等の詩稿その他わが書の多くが失くなつたと、當然想像してゐた。この考へど、また我が流竄のために我が身に蔽ひかぶさつた他の多くの勞苦のため、この作のために企圖した崇高な構想を全然放棄してしまつた。然し圖らずも運命が意外にも此作を私の手に返し、且つ君達も宜しとするにより、本來の思想を思ひ起し、恩寵の私に與へらるゝまゝに、筆を進めることを試みよう」と云つたといふ。疑ひもなく、ダンテは、漂浪中、自然、人生、社會より受けた印象と感想とを手記し、或は時に心に浮び來つた詩句を書き留め、後これを神曲に挿入

したに相違ない。天國篇一七の一一〇、一一一に——

Sì che se loco m'è tolto più caro,

Io non perdessi gli altri per miei carmi.

かくて最愛の處（フィレンツェ）が私より奪はれるとも

わが詩によりせめて他の處（避難處）を失ふべきでない。

と云つてゐる。そして既に「學徒としてのダンテ」の項に於て述べたやうに、實に超人的努力と熱誠とをもつて、彼は流竄中に勉學を繼續した。そして神曲のほか「饗宴」「俗語論」「帝政論」等の書を著した。まことに彼の天才は制限を受くれば受くるほど、最も能くその力を發揮した。恰度河幅が狭まるに従つて奔流が猛烈にな

るやうであつた。障礙物は彼を激勵する役目しかしなかつた。順境に置かれたならば死滅すべき焰が、逆境ゆゑに燃え上がつた。そこで我等の心を注むべきは、斯くのごとき幻滅の境遇にあつて、而して詩に於ける曠世の天才を有し、また學藝に對して貪婪なほどの慾求を抱いてゐながら、ダンテが遂に身を隱遁瞑想の生活に全然投ずることをしなかつたことである。確かに、世を棄て、學究詩作の孤獨生活に慰安を求めるといふ誘惑が、彼にとつてかなり強いものであつたに相違ない。彼の道徳的熱誠は、哲學的瞑想のために俗世界より退隱すべく餘りに強烈ではあつたが、然し彼の使命を徹底的に考察し、且つ彼の詩を完成するため、俗事に煩はされざる閑暇を所有し得る寂靜な處の必要を感じたに相違ない。そして或る僧院へ彼の足を向けたとするも不自然とは思へない。修道僧は僧院の闕に立つて囁く——

O beata solitudo

O sola beatitudo.

あゝめぐまれし孤獨よ

あゝたゞ一つの祝福よ。

こゝに一つの傳説がある。ハインリッヒの死後、ダンテは、アグッビオ—Agubbio—地方にあるカトリリア山—Monte Catrìa—の中腹にある「サンタ・クロチェ・ディ・フォンテ・アエ・ラナ」—Santa Croce di Fonte Avellana—修道院に、平安の隱退處を求めたといふのである。天國篇二一の一〇六一—一七に聖ダミアヌスがあらはれて、ダンテにこの修道院のことを述べてゐる——

伊太利亞の兩岸のあひだ、汝の故郷を

距つること遠からず、巖石聳え

高くして遙か下方に雷霆とごろく。

巖石はカトッリアと呼ばれる隆起をなし

その麓に禮拜のためにのみ

用ゐらるる僧庵が建てられてある

.....

そこにて俺は道心堅固に神に仕へ

橄欖液の食をのみ採り

冥想思索に満足して安らげく

暑さ寒さを過ごした。

アッペンニノ山脈中の此高處より、峯の森越に故國フィレンツェを眺めて、郷愁に

溢れたと傳へられる。しかし遂に修道院の冥想生活も、大學の學徒生活も、ダンテの能動的な性格にそぐはなかつた。彼は如何にしても「人類」より離れ得なかつた。「俗」より離れ得なかつた。彼の冥想の翼は高く高く飛翔することはしたが、それは再び歸り來つて現實の世界を美化し聖化すべきものであつた。平和的世界といふ彼の理想は、ハインリッヒの死とともに死滅してしまつたが、尙ほ彼はフィレンツェに對し、全伊太利亞に對し、全世界に對して、神の正しき審判を下すことに於て、彼の職分を果たさねばならなかつた。そこで彼の巡禮は修道院より修道院へのそれになしに、反對に、都市より都市へ、宮廷より宮廷へのそれであつた。政争と陰謀とを中心であつたところの諸侯の宮廷より宮廷へのそれであつた。第一にルッカに於けるウグッチオネの陣營へ、次いでカン・グランデの賑やかな宮廷へと平安のため、また神曲の聖詩の意想を練るために訪れるのであつた。この點に於てはミルトンと大いに異つてゐた。同じく宗教詩人であり、また政治に携はりはしたが、ミルトン

の詩の泉は、政治に奔走する間は、全く塞がれてしまつた。「彼の靈魂は星のごとく離れて住んでゐた」。たゞ沈黙の處に於てのみ詩の靈感を受けた。然るにダンテは、これとは正反對に、詩の靈感を受くるがために、擾亂の都市に行き、政争の宮廷へ赴かねばならなかつた。嵐の中心に於て平安を見出すといふのが彼の性格であつた。かくて彼は足を先づ當時の最も政治的精力に富んでゐると見えたルッカへ向けた。

ルッカ訪問については、ダンテは何等の記録を残してゐない。しかし彼がルッカに赴いたのは、この都市がダンテの友黨の権力の下にあつた時、即ち一三二四年六月十四日より一六年の四月十日までの間であつたに相違ない。煉獄篇二四の四四—四五に、ルッカの人ボナヂウンター Bonagiunta がダンテにむかひ——

.....彼女はいかに人が難ずるとも

わが邑を汝に樂しきものとするであらう。

と云つてゐる。茲に「彼女」とあるは何人であるか明白でないが、多分ヂェントウガ・モラ—Gentucca Mora—といふ美しき女であつて、通常コシオリノ・ディ・フォンドラ—Cosiorino di Fondora—といふ者の妻であつたと稱せられる。ダンテと彼女との關係がいろ／＼に憶測されたが、註解者ブティは、ダンテが「彼女に心惹かれたのは、彼女の大きな徳と純潔との故であつて、何等他の愛でない」と云つてゐる。ダンテはルッカの人民に對して、殆んど好感を抱いてゐなかつたと見える。彼等は盜賊であり、守錢奴であつて、地獄に多く投ぜられてゐる。地獄篇二一の四一、四二に此都市のことを述べて——

Ognun v' è barattier, fuor che Ponturo;

彼處にはポントッコのほか悉く汚吏である。

否イヤが金錢のため彼處に然イタとせられる。

と云つてゐる。ポントッコは十三世紀初頭に於けるルッカの政治家であつて、市の殆んど凡ての官職を買収操縦したと稱せらる。こゝに「ほか」とあるは、ダンテの辛辣な反語である。

ダンテのルッカ滞在中、即ち一三一五年の五月十九日に、フィレンツェは、ダンテを含めて一般の追放者等に對して大赦を宣言した。但しこれは一定の罰金を拂ひ、且つ聖約翰會堂サンジョヴァンネに於て公然謝罪の意を表すると云ふ條件を以つてであつた。斯くするは無論自己の犯罪を認識することに成るのである。そこでダンテは「フィレンツェの一

友に寄する書翰」に於て、斷然これを拒絶してしまつた。この書翰は長らく疑問とせられてゐたが、今日では一般に眞正なものとして承認せられる。茲に一友とあるは、或はダンテの妻の兄弟ルッチオ・ドナティであつたらうと想像せられる。ダンテは先づフィレンツェ歸還のために盡力する友の厚意を謝し、「追放者の友人達となつてくれる者が稀なるがゆゑに」一層感謝の念を厚うすると云ひ、「されば斯くのごときが是れ、殆んど十五年近くの追放の苦難の後に、ダンテ・アリギエリを故郷なる都市に歸らす有難い召還の方法であらうか！ 是れ、全世界に明白なる無罪に對しまた不斷の勉勵の汗と勞苦とに對する報酬であらうか！……否、わが父よ、斯くのごとき道によつては、自分は我が故郷なる都市に歸らぬであらう。まづ貴下自身により、次いで他の人々によつて、もし或る他の道が見出され得るならば、自分は緩ゆるからの歩みをもつて辿るであらう。然し若し斯くのごとき道によつてフィレンツェへ入ること能はずば、自分は永久にフィレンツェへ入らぬであらう。如何なる處に於て

も太陽と星とを眺め得るではないか。わが同胞市民の眼前に、汚辱され、汚名を被らされてまで、必ずしもフィレンツェに入らなくとも、凡そ青空の下に、いとも貴き眞理を瞑想し得るではないか。確かに自分はバンに事缺かぬであらう」。

ウグッチオネ・デ・ラ・ファッヂウオラー—Ugnccione della Fagginola—はロマニアに於けるギベリノ黨の統領として、一三一五年八月二十五日に、フィレンツェのゲルフォ同盟軍を全敗せしめた。その年の十一月六日に、ダンテに對する最後の宣告をフィレンツェが發した、ダンテ以下の名を擧げて、これを反逆者なりと決定し、若し捕縛せらるれば、處刑場にて斬首すべしといふのであつた。一三一六年四月、ウグッチオネはルッカを敵黨に奪はれてエロナに退いた。そこでフィレンツェ政府はやゝ寛大なる態度を採り、同年六月二日、追放者達に對し、更に大赦を行つたが、然し凡そフィレンツェ市にむかひ武力的反抗をなせし者、また一三〇一年十一月より二年七月に亘り、「ボ

デスタ」によつて處罰せられし者、および瀆職罪のために追放された者は皆この大赦より除外された。ダンテは以上の三項のいづれにも該當するものとして、大赦にあづかることが出来なかつた。

エロナは、當時、ギベリノ黨の根據地であつた。カン・グランデ・デ・ラ・スカラ—Can Grande della Scala—は偉大なる勢力をもつて治め、威力ある宮廷を維持してゐた。ウグッチオネも敗北の後こゝに避難したが、ダンテも當然足をこゝに向けた。エロナは、自然に、追放されしギベリノ黨の集合地となつた。カン・グランデはギベリノ黨の首領となり、藝術および文學の保護者として名高かつた。ダンテの第一回エロナ訪問の際に、カン・グランデはまだ若年であつたが、今は赫々たる名聲が全伊太利亞に汎き人物となつてゐた。彼の宮廷に於て「汝等は獨逸人、拉甸人、佛蘭西人、フランダア人、英國人等が共に談ずるを聽き得たであらう。またこゝに汝

等は占星學、哲學および神學について論議せらるゝを聞き得たであらう」とチポラ
—Cipolla—が云つてゐる。カン・グランデの生涯について、ラスキンは“Verona and
its Rivers”のうちに、興味ふかき話を記してゐる。「第一に彼は彼の妻ヨアンナ—
Joanna—をcoup de main(急襲)によつて羸たのであつた。彼は羅馬に於て彼女を少
女時代に戀ひした。その後彼女は結婚すべく蘇格蘭土へ遣られるやうになり、途上
アディヂェの門さしてエロナを通過せねばならなかつた。そこでカン・グランデは彼女
を攫み捕へ、蘇格蘭土へ遣すのには、彼女は餘りに貴い寶石—preziosa gemma—で
あると主張した。かくて彼女は先へ行かなかつた。それより彼は獨逸人に對してエ
ロナを防備し、巖石を開鑿して濠となし、城壁と櫓とを築造し、宮廷をつくり、細
心な款待の道を講じ、ロムバルディアのギベリノ黨の首領となり、他の凡ての國々
よりの高貴な追放者達を迎へ、自ら激闘してギチエンツァを略し、次いでバドヴを領
した……そして一三二九年に、三十七歳の時、林檎をまた熱い時に食して死去した。

エロナの年代記によれば、彼は丈高く、美男子で、舉動言行ともに甚だ典雅で、
武士的男性美の典型的人物であつたといふ。いかに彼が人々を款待したかは、新し
く彼の客人となつた一追放者の感激に充ちた記事で推測することが出来る。それを
シスモンディが引用してゐる。曰く「スカラの宮殿に於ては、別々な室が、彼等の身
分に準じて、追放者に當てがはれた。おの／＼専屬の僕達がつけられ、善く整へら
れた私用食卓が提供された」、そして武士、流竄者、詩人、藝術家、宗教家等のため
に、夫々別趣向の意匠を部屋に施し「食事中音楽者、道化者、および奇術者達が、
部屋部屋で演奏演戲した」と。更にシスモンディはカン・グランデの人となりに就い
て云つてゐる「豪邁な性格で、卒直であり、主義に忠實で、堅く言質を遵守する人物
であつた。彼は自分の軍隊のみならず、人民および敵にさへも慕はれた」と。彼の
宮廷の壯麗さは、たゞフリドリヒ二世のそれによつて匹敵されたのみであつたと、
ボッカッチオは云つてゐる。ダンテは彼に對して「天國篇」を獻ずる長い書翰を認めた。

この書翰については種々議論されたが、ムウア博士の研究によつて真正であると確定されたと云つてよい—Moore: Studies in Dante, III, pp. 284 ff. この書翰の日附は確知するに由ないが、先づ一三一九年頃であつたであらう。この時は未だ天國篇は完成してゐなかつたが、最初の十曲は書き終つてゐたであらう。「威大にし最も戰勝的な主君、エロナおよびギエンツァ市に於けるカエサルに至聖なる主權の代理者なる主君カン・グランデ・デルラ・スカラに對し、その最も忠誠なる僕、フィレンツェ人として生れたれども、性向に於ては然らざるダンテ・アリギエリ、幸福なる長壽を祈り、その名の光榮の永久に増大せんことを祈りまつる」と冒頭してゐる。それよりダンテは、彼の名聲を慕ひ、「南の女王がエルサレムを訪れた」やうに、エロナを訪れたが、直接に目撃して更に一層敬服の念を強うしたことを述べてゐる。進んで友情に報ゆるがために「天國篇」を献ずる所以を記し、神曲の解釋法について論じ、喜曲—*comœdia*—の、悲曲—*tragedia*—との區別について語つてゐる。

カン・グランデの捕虜となつたアルベルティノ・ムッサー—Albertino Musiatio は、然し、彼のことを苛酷で、剛情で、自制心を缺き、頑冥な人物であつたと云つてゐる。更に彼とダンテとについて三つの傳説が残されてゐる。ベトッラルカに依れば、カン・グランデの宮廷に於てダンテは日に日に不機嫌になつて行つた。當時宮廷に非常の人氣のある道化役者がゐたが、多分この者がダンテの氣に障つたのであらうとカン・グランデは考へた。そこで彼はこの道化役者を呼び寄せて大いに讃辭を浴びせかけ、そしてダンテにむかひ「この者は愚かな者ではあるが、我々すべてを樂しますことを承知してゐて、皆に可愛がられてゐるのに、如何して知慧を以つて全く有名な君が、少しも我々を樂しませることが出来ないのか、不思議でならない」と云つた。するとダンテは「もし君にして、同類同心であることが友情の眞の原因であることを記憶してさへをれば、これは怪しむに足りないことである」と答へると云

ふのである。即ち道化役者の演戯を見て楽しむ者は、道化役者程度の者であると諷したのである。

また同じやうな逸話を、かの有名なフィンツェの宗教改革者であつたサヴォナロラの祖父なるミケレ・サヴォナロラが傳へてゐる。カン・グランデより褒美として一着の美しい外衣を受けた道化役者が、これをダンテに觀せて「君は君の凡ての書翰、十四行詩、著作を以つてして、未だ嘗て斯くの如き贈物を受けなかつた」と云つた。これに對してダンテは「君の云ふところは本當である。俺でなく、君が此を受けるに至つた譯は、君は同心の者を見出し、わしは未だ同心の者を見出さないからである、此事を承知せよ」と答へたといふことである。

更に、カン・グランデといふ名即ち Cane (犬) に關聯した逸話がある。一日食卓についてゐた時、カン・グランデはダンテにからかうつもりで、僕達に命じ、皿に残れる骨を皆あつめて、ダンテの足もとに置かしめた。やがて食卓が取拂らは

れた時、凡ての人々が笑ひ出し、ダンテに骨商人であるかと訊ねた。すると彼は直ぐに暗に人々を犬に諷して答へた「犬共なればこそ其骨までをみな食らつたとして、別に不思議はない。しかし俺は犬でないので、骨までは食らうことが出来なかつた」
と。

以上は素より傳説に過ぎないのであるが、然しダンテの辛辣な方面を仄めかしてゐる。カン・グランデについて彼自らの記してゐるところは皆賞讃に充ちてゐるので、カン・グランデが以上の傳説逸話のうちにあるやうな言語をダンテに對して發したとは考へられない。但しダンテは「饗宴」四の一六の七一に、慇懃について論ずる際に、カン・グランデの兄弟アルブイノ — Albuino — のことを貶して書いてゐるので、或は寄食の初期のころアルブイノが多少ダンテに對して無禮な態度を採つたのかも知れない。

ボッカッチオによれば、ダンテが一日ゼロナの市街を歩み、一團の女達のゐた或る戸口のまへを通過した時、その一人が静かな聲で—*“Eccovi l’ nom ch’ a stato all’ Inferno!”*—「地獄にゐた人を見よ」—と云つた。すると此に答へて他のひとりの女が「汝のいふところは本當である。下界の熱と煙とで、髭があんなに縮れ、顔色が薄黒くなつてゐるのを見ないか」と云つた。ダンテは此會話を背後に聞きつゝ、微笑して過ぎ去つたといふのである。

一三二七年にダンテはラゼンナに赴いたと見えるが、この處は彼の最後の避難處となつた。ラゼンナの「ボデスタ」グッド・ダ・ポレンタ—*Guido da Polenta*—は追放者たるダンテの氣を損ぜざるやう細心な態度をもつて彼を招いた。まことに斯くのごとき人物を保護者としたのは、ダンテにとつて幸運であつた。この人は「地獄篇」

第五曲にいづるフランチェスカ・ダ・リミニの甥であつた。自ら趣味の詩人であつて、十六篇の「バルラタ」が保存されてゐるといふボレンタの懇篤な庇護を受け、多分少くとも二人の息子と共に、ダンテは晩年をこゝに送つた。

息子ピエトッロが父ダンテの追放に伴うた確證がある。リッチー—*Ricci*—は一二三二年一月四日附の一文書を公刊したが、それに據れば *Petrus filius Dantis Aldigerii de Florenois*—「フィレンツェのダンテ・アリギエリの子ピエトッロ」—がラゼンナに於て既に二つの僧職に就いてゐたことが分かる。更にダンテの娘ベアトッリチエは、後に此都市の「ステファノ・デル・ルルギア」—*Stefano dell’ Uivia*— 尼僧院の一員となつてゐるので、多分この頃、彼女も父ダンテとともにゐたであらう。但し皆一家のうち生活したのではなかつたらう。

ラゼンナは伊太利亞の凡ての都市のうち、羅馬に次いで歴史的聯想と古典的興味
とに富んだものであつた。コンスタンティヌス大帝の羅馬帝國回復の盛んな時代に
建てられた建築的記念物があつた。ダンテはゼランナに於て恐らく、追放の生活中
初めて、幾分財政上の獨立を得たであらう。即ち俗語の修辭學を教へて多少自分の
力で報酬を得たであらう。こゝに彼は詩について殊に俗語について多くの學生を教
へ、且つ訓練した」とボッカッチオは云つてゐる。

この頃、ボロニア大學の教授で、伊太利亞の詩と古典的傳説との愛好者であつた
デオワンニ・デル・ギルヂリオ—Giovanni del Virgilio—といふ人がゐた。詩聖ギルギ
リウスの熱烈な崇拜者であつたので「ギルヂリオ」と呼ばれたのであつた。拉句語
の牧歌をダンテにおくり、「地獄篇」と「煉獄篇」とを讚美はしたが、何故に三界遍
歴といふがごとき嚴肅な題材を俗語で書いたかを詰り、寧ろハインリッヒ七世の崩御

モンテ・カティニ戰役、カン・グランデのバドワ征討、ナポリ王ロベルトの海戦のご
ときを主題とし、そして詩人にふさはしき唯一の言語即ち拉句語をもつて書けよと
勸告した。更に、ダンテにして承諾せば、ダンテに詩人としての月桂冠を獲得せし
めるやうに盡力しようとの約束した。この牧歌のをはりにデル・ギルヂリオは、自ら
を聲騒がしき鷺鳥に、ダンテを聲澄みわたる白鳥に、なぞらへてゐる。ダンテはこ
れに答へて、テオクリストおよびギルギリウスなどの田園詩風に倣つた「牧歌」を
おくり、先づこの青年詩人デル・ギルヂリオ稱讚し——

.....decus vaturn quoque nomen in auras
Fluxit,.....

……詩人の光榮はもとより、名さへも風に
散らさる

と云ひ、フィレンツェに月桂冠を獲んどの希望を述べ、天國篇の完成を待ち、その十曲をおくる旨を歌つてゐる。

デル・ギルヂリオは第二回の牧歌をおくり、ダンテのフィレンツェ歸還を祈り、然し一度はボロニアを訪るるやうに勸めてゐる。これに對してダンテは再び答への牧歌を書き、ダンテの死後その子これを發見して送り、一年を経て届いたと云はれるが、果たしてこれはダンテの筆になつたものであるか議論がある。もしダンテが書いたものとするれば、この牧歌は彼の絶筆であつたと思はれる。以上二篇のうちに、ダンテの有してゐた快よきユウモアの閃きを見ることが出来る。

ダンテが、詩人としての名聲が高まり、遂にそのためにフィレンツェの門が彼のために開くに至らんことを、如何に願つてゐたかは、以上の牧歌によつて明らかであ

るが、更に天國篇二五の一―九に

Se mai continga che il Poenna sacro,

Al quale ha posto mano e cielo e terra,

Sì che m' ha fatto per più anni macro,

Vinea la crudeltà che fuor mi serra

Del bello ovil, dov' io dormii agnello

Ninnico ai lupi che gli danno guerra;

Con altra voce onnai, con altro vello

Ritornero' poeta, ed in sul fonte

Del mio battesmo prenderò il cappello;

天と地とが手を置き

多年の間わたしを憐れしめた此聖詩が

かの戦ひを齎らす狼ごもの敵なる

一疋の羔として私が眠つてゐた美しい

羊檻より私を閉めだした残忍に

もし勝ち得ることもあれば

その時異なる聲、異なる羊毛の

詩人として私は歸還し

わが洗禮盤にて花の冠を戴くであらう。

と歌つてゐるので明白である。

ラゼンナの感化は神曲に少からず表れてゐる。可憐なるフランチェスカの幸福なり

し少女時代の思ひ出あたらしきリミニは、この都市の近くにあつた。既に述べたやうに、グ*ド・ダ・ボレンタはフランチェスカの甥であつて、またバオロのひとりの兄弟は、當時リミニの領主であつた。地獄篇第五曲にある兩人の戀物語のくだりにダンテが最後に筆を加へたのは、或はこの頃であつたかも知れぬ。煉獄篇第二十八曲に於ける「神々しい林」— *divina foresta*— は、ラゼンナの有名なる松林ピネター *Pinetar* の印象の追憶であつたらうと想像せられる。ダンテは思ひを遠く天上のベアトリチエに馳せて、ひたすら天國篇の完成に努めた。ポッカチオの記するところによれば、ダンテは數曲を完成することに、第一にカン・グランデに示し、後望む者に見せたといふ。カン・グランデに天國篇を献する書翰の一節に「公衆の益のために有用な此等のことごもを放棄せねばならぬ程に、窮迫が我身に烈しく迫る、しかし有益な註解を繼續する他の方法が私に與へられんことを卿に希望す」と書いてゐる。斯くのごとき言葉は、多分教授の方も都合よくゆかなかつた時、落膽の氣分のうちに

記されたものであらう。けれどもダンテの天才は障礙のうちにあつて最も深く注ぐのであつた。

それにダンテの名聲が高くなるにつれて、彼の思想や藝術に對して、異端糺弾者達の眼が鋭く注がれたであらう。十五世紀の二つの稿本に、次のごとき傳説が記されてある。即ちダンテが神曲を書いた時、人々は此を領解し得ずして、これは正統的信仰に反するものであると稱した。フランシスクス派教團の一修道僧の糺弾に答へて、彼は「Credo—「信条」を作成して正統派の信仰を告白したといふのである。今日残れる Credo は疑ひもなくダンテの作つたものでないが、思ひ切つて所信を表白した「神曲」より生ずる誤解を除くために、この種の告白を公にしたといふは有り得ないことではない。

この間ダンテの休みなき心は、單に俗語の詩についての教授や、或は天國篇の作成に奪ひつくされずして、一三二〇年一月二十日にエロナに於て「水地論」を講じたと傳へられる。これに就ては既に「學徒としてのダンテ」の項に於て述べた。

一三二一年の夏、數人のエネツィアの水夫達がラゼンナの兵卒等と喧嘩をして殺された。エネツィア市の長官は直ちに開戦の準備をした。即ち長官チオヴンニ・ソランツォー Giovanni Soranzo はフォルリと攻守同盟を結び、リミニとチエセナ、イモラおよびファエンツァの中立を獲得した。ラゼンナのグッド・ダ・ポレンタは進退きはまつて、エネツィアに使節を派遣し、和を講じようとした。その使節の一人にダンテが加へられた。フィリップ・ギラニー一四〇四年死—曰く「エネツィア人は彼—ダンテ—の雄辯の力を怕れて彼と會見することを繰返し拒絶した。遂に熱病に襲はれたので、彼は海路によりラゼンナに運び返されんことを乞ふた。しかしエネツィア人はダンテ

に對する憤激を増し、斷然これを拒絶した。そこで彼は陸路に依り、疲勞を來たし且つ健康に宜しからざる旅をせねばならなかつた。かくて彼の罹つてゐた熱病が險惡となり、遂にラゼンナに到着後數日して死去するに至つた」と。

しかしダンテは、エネツィアの長官より和議の條件を受け取り、最も近い道によつてラゼンナに歸つたといふのが本當らしく思はれる。死因は正確に分からないが、疲勞し、沮喪して熱病に襲はれ、遂に一三二一年九月十三日、十四日の間に、五十六歳にして死去したのである。思ふに、使節として赴く間際までに、神曲天國篇が完成されたであらう。全身の力を傾倒して此を作り上げた後、エネツィア行の使命が成功せず、ために意氣消沈せる折柄、伊太利亞低地のマラツヤ熱に襲はれて、遂に死去するに至つたのであらう。ギッラニよりも約半世紀も後に書かれたマネッティの「ダンテ傳」には、ダンテの死を、彼の努力の失敗と、また彼がエネツィアにて受けし侮辱的待遇とに歸してゐる。またダンテは自ら進んで陸路をとつたので、それ

はエネツィアの艦隊に遇ふといふ危険を避くるためであつたとしてゐる。

臨終の際に於ける彼の心境については、彼自身の言葉を茲に再び引用せねばならぬ「饗宴」四の二八の一六―五九に「あだかも良き水夫が港に近づく時に、帆をおろして穩かに悠然として入港するやうに、我等も我等の現世的活動の帆をおろし、誠心誠意をもつて、神に歸るべきである。かくて我等は全く欣然として、全く安らかに、彼の港に到り得るであらう……斯くのごとき死に於ては、苦痛もなく、また何等の悔恨もなく、恰度熟せる林檎のやうに、輕らかに、また無理なところなく、その枝より落つるやうに、我等の靈魂は、何の苦痛もなく、今まで宿りをりし肉體より離れるのである……それで長き旅より歸り來る者が、おのが都の門に入るに先きだちその市民達が出で、此を迎へるやうに、永遠の生涯にある市民達が、高貴な靈魂を迎へるであらう。お、帆を挙げたま、此港に突進し、斯くして烈風の真中

になんぢら自らを破滅し、且つ斯く長き汝等の航海の目的たりし其處に於て、なんぢら自らを亡ぼすとは、淺間しくも、おぞましいことである！」と云つてゐる。我等は茲にストア派の自若たる死を心に浮べる。否、それ以上に崇高な死を思ひ浮べる。信仰によれる現世以上の生命について、ダンテは天國篇一四の二五—二七に曰く——

Qual si lamenta perchè qui si moia,

Per viver colassu, non vide quive

Lo refrigerio dell' eterna ploia.

天上に生きんがため地上に

われらの死すべきを嘆く人は

永遠の雨の清新をこゝに見ないからである。

グッド・ダ・ボレンタは、いたくダンテの死を悼み「詩人としての飾りもて飾つた」とポッカッチオは云つてゐる。茲に「飾」とあるは無論、ダンテの願つてゐた月桂冠のことであつた。そして多分「神曲」の寫本を一部添へて遺骸を石棺に入れ、ラゼンナのフランシスクス派の會堂の門前に埋葬された。「詩人たり、また大なる哲學者たるに適はしき禮をもつて」埋葬された。

天國篇の最後の十三曲の發見されし事情について興味ある傳説をポッカッチオは書いてゐる。即ちダンテの死後神曲の最後の十三曲が缺けてゐたので、數ヶ月のあひだ探がしたが發見するに至らなかつた。しかるに一夜、純白の装ひせる父ダンテが現れて、息子のヤコボにその在處あつたを示したといふのである。これは素より傳説に過

ぎないが、ダンテの生前に、神曲天國篇の全部が公にせられなかつたことを立證してゐる。

さて肉體の崩壊とともに、ダンテの靈は天上にむかつたが、然し彼の遺骸は尙も漂浪をつゞけて、フィレンツェへは歸らなかつた。五たび—一三九六年、一四三〇年、一四七六年、一五一九年、一八六五年—祖國はその最も卓絶せる子—ダンテの—遺骸を要求したが、その都度拒絶されてしまつた。グッド・ソゼ・ロがダンテの遺骸を入れた古代の墓所は、十四世紀の中ごろに修復された。一三七八年日附の稿本によれば、二つの碑文がその時墳墓に記されてゐた。一つはベルナルドゥス・デ・カナトル—Bernardus de Canatro—の作で、一三五三年頃に書かれ、今日まで残つてゐる。これは久しくダンテ自身の書いたものであると想像されてゐたが、十四世紀の稿本はこれをカナトルに歸してゐる。その文に曰く—

Jura monarchiae Superos Phlegethonta lacusque
Lustrando cecini voluerunt Fata quousque,
Sed quia pars cessit melioribus hospita castris
Actoremque [sic] suum petit felicior astris,
Hic claudor Dantes, patriis extorris ab oris,
Quem genuit parvi. Florentia mater amoris.

帝政の權能と、天上と、黄泉とを
示されて、我は運命の意のまゝに歌へり。
されど世に容れざりし我は更に善き國に入り
更に幸福に、星辰の間に其造主に見ゆ。

愛を缺ける母なるフィレンツェの生めるダンテ
祖國の境界より追放されて此處に封ぜらる。

一四八三年に、有名な彫刻家で建築家であつたピエトロ・ロムバルデー—Pietro Lombardi—が、ベルナルド・ベムボ Bernardo Bembo の指揮のもとにこの碑文を再刻し、その上に “S. V. F.”—Sibi Vivens Fecit—の文字を置き、そして机に凭りて讀書せるダンテの薄肉彫を刻んだ。

他の一つはラエンナのミンギノ・ダ・メッソノ—Minghino da Mezzano—の作であつて “Inclita fama cuius universum penetrat orbem” と始まる Moore: Studies in Dante. IV. p. 173. 一六九二年に、法王の使節コルシ—Corsi—は靈廟を修葺したが、その時次に記す奇怪な話、即ちダンテの遺骨陰蔽の曝露せんことを恐れて妨害せんとした修道僧達を撃退するために四十人の警官の援助を受けたといふことである。

一七八〇年に、カルディナレ・ゴンツァガ—Cardinale Gonzaga—は、今日も残つてゐる圓蓋とともに靈廟を修葺した。そして遺骨の存在を確むるために石棺を開くやうに命じた。この事について、公文書には曖昧に「真相を確むるに必要なことを發見した」と記されてあるだけである。然しこの僧院の修道僧の一人は「ダンテの石棺が開かれたが、中に何物も發見されなかつた。そこで石棺はカルディナレの封印にて再び封ぜられ、而して沈黙は此ことに就て全く守られた」と記してゐる。

一八六五年に、伊太利亞はダンテの生誕六百年祭を行ふ準備をし、墳墓を開きて遺骨を展示することが重要な事項であつた。墳墓を修葺するには如何してもブラッチオフォルテ—Braccioforte—禮拜堂の壁の一部分を取除くことが必要であつた。この仕事の進行中に、人足の一人の鶴嘴が木片にあたつて、空洞な響を發した。幾個か

の石を取除けて、一個の本製の箱が発見されたが、その一部分が挫け落ちて、人間の骨格があらはれた。底の本片に次の碑文が書いてあつた。

'Dantis Ossa

Denuper revisa die 3 Junii

1677.'

ダンテの遺骨

一六七七年

六月三日 再檢。

更に蓋の上には――

'Dantis Ossa

A me Fre Antonio Santi

hic posita

Ano 1677 Die 18 Octobris.'

ダンテの遺骨

修道僧アントニオ・サンテ

茲に置く

紀元一六七七年十月十八日。

と記されてあつた。この報知によつてラヴェンナ全市は大いに興奮した。市の有力者

達は現場に駆けつけ、鑑識家達は召集されて骨格を判定した。数箇の骨の外みな相ひつらなつた。丈も能く一致し、頭蓋は、比較するためフィレンツェより持つて來た死面に應合したといふ。それより遺骸が入れてあると想像されてゐた石棺を開いて見たところが、果して中は空虚であつた。たゞ少しばかりの月桂樹の葉と、いさゝかの塵のやうなものと、恰度前記の骨格に不足してゐた骨に相當する骨があつた。即ち石棺の背後から穴が穿たれて、遺骸が取り出され、そして穴が煉瓦とセメントで塞がれ、外部から塗られた。

さて遺骸がひそかに石棺より取出されて僧院の壁のうちに秘されたのは、何の爲であつたのか。最も我等の心を首肯せしむる説は、一五一四年—一五一九年のあひだに、フィレンツェの有力者達が、ラエーナを監理してゐた法王レオ十世に、フィレンツェへダマンテの遺骸を取り戻すやうに説得し、そしてミカエルアンヂェロが適當な

墓所を準備しようとして自ら申出でた時、この僧院の修道僧達は驚愕して、彼等の寶とする此遺骨を陰蔽した。これが圖らずも三百五十年後、最も好適な時に發見されたのだといふのである。骨格は祭の三日間展示され、そして六月二十六日に鉛と胡桃の重い柩のうちに封じ入れ、そして、かのグッド・ノヱロが約六百年前に恭しくこれを横へた古い石棺のうちに再び置かれたのであつた。尙ほダマンテの墳墓および碑文に就ては、前記ムウア博士の「ダマンテ研究」第四卷一六六—二〇八頁にわたる *The Tomb of Dante* を見よ。

三「帝政論」

ダンテの政治的運命について述べ終つたが、我等は次に彼の抱いてゐた政治的理想について知らねばならぬ。彼は實際的政治家として政争の渦中に身を投じ遂に追放さるるに至つた程であつたが、同時に彼は崇高博大なる理想を抱いてゐた政治哲學者であつた。實は流竄の運命を招くに至つたのも、彼が政治的理想主義者であつたがためであつた。彼にして、單に自己の利益と權力の獲得とを目的とする政治家であつたとするならば、彼の能力と精力とをもつてして、必ずや彼は權勢赫々たる領袖として永く榮華を楽しみ得たであらう。然るに偉大なる——到底實現不可能なほどに偉大なる政治的理想を抱いてゐたがゆゑに、悲痛なる運命を招くに至つたのである。然も我々は成功せるフィレンツェの政治家としてのダンテを失ひしことを少しも

後悔せずして、壯烈なる政治的理想主義者としてのダンテを得たことを限りなく尊ぶしとするものである。流竄の苦惱中にあつても、彼は到底理想的帝政に對する憧憬を遏むるに由なく、却つていよいよ熱烈にこれが實現を俟ち望んだ。彼は地上於ける政治的活動より鎖ざされながら、彼の思想は政治哲學の瞑想に忙しくあつた。そして遂に筆をとつて「De Monarchia」——「帝政論」の一篇を書いて、彼の博大な字內的帝國について論じた。本書は歐洲政治思想史上相等の位置を占むべきものである。ダンテの志は人類の個人的救済とともに、その全體としての救済でもあつた。「饗宴」は人類の罪惡よりの救済を、智的方面より見たもので、「帝政論」は同じ問題を、政治的乃至社會的方面より見たものである。而して共に目指すところは人類の「平和」であつた。もしダンテにして遁世的瞑想法であつたならば、たゞ靈魂の其救ひのためのみ關心したであらう。然し彼は人類に對する同情に充ちた活動的な人物であつて、決して只自らのみ救はるゝことを欲しなかつた。彼にとつては、

人類救済の問題は個人的生命と等しく社會的乃至政治的生命に關るものであつた。トルストイは「我が宗教」の第三章に「基督教が個人の救ひに觸れて、國家の一般的問題に觸れないといふは嘘である」と云つてゐる。

〔ダンテは高遠なる政治的宗教的理想を抱いてゐた。即ち宇内を包括する「神聖羅馬帝國」と、靈界を統一する「神聖羅馬教會」の二大制度これである。これは遠くヘブライの神政々治の理想に由來するもので、凡そ人類の頭腦に浮び得し制度の最高最大なものであらう。この二大制度が提携して而も相冒さざるところに人類の眞の平安と幸福が成立するとは、ダンテ學生の所信であつた。然るに既に述べたやうに、當時「羅馬教會」の代表者なる法王は、本來の使命をわすれ、グレゴリウス七世およびインノケンツ三世によつて教會は謂ゆる俗權を擴大して政治に干與し、皇帝はまた「羅馬帝國」の使命を忘れ、教會の此專横を制遏し得ない状態であつた。〕

「帝政論」一篇は此間にあつて「羅馬帝國」の神聖と權威とを宣明したものであつた。帝政論は拉句語で書かれ、三篇より成つてゐる。第一篇に於て、人類の眞の文明は世界的平和のうちに於てのみ實現せらるべきであり、而して世界的平和は、一人の絶對的權力を有する支配者によつて統治せらるる世界的帝政の下に於てのみ可能である所以を論じ。第二篇に於て、羅馬帝國がこの要求を充たす資格と特權とを有することを論證し。第三篇は本書中最も重要な部分であつて、帝權は法權に據らずして、直接神に據るものであることを論斷したものであつた。以下尙ほ詳しく述べるに先立ち、本書の梗概を記しつゝ、その中興味ある言葉を引用して行くことにする。括弧を附してある部分は直接の引用である。

* * *

第一篇第一章の劈頭にダンテは凡そ人間が後代の人々に對して負へる責任に就て述べて云ふ、「より高き自然 (natura superior—神) が眞理の愛を印銘した人々は凡

て、先達者等の勞苦によつて富ましめられたやうに、彼等自らも等しく後に來るべき人々のために豫め勞し、斯くて後代の者等をして依つて以つて自らを富まし得るものを有せしめることを、主要なる關心事とせねばならぬと思はれる」と。

更に引續いてダンテは云ふ、「即ち自らは公共の教訓に浸されながら、而も公共の利益のために何等貢献しようと思ひしない者は、宜しく職責を果たさざることの甚だしきを承知すべきである。斯くの如き人は『期にいたりて實をむすぶところの、水流のほとりの樹』ではなくて、寧ろ、常に吸ひ込みて、その呑み込みしものを決して吐き返すことのない貪慾な渦卷である。そこで屢此等のことを自ら考へて、他日才能埋没の非難を加へられんことを恐れ、私は只に芽を出すことのみならず、また公益のために果をむすび、そして他の人々の企てしことなき眞理を宣明しようと思ふ。と云ふのは、ユクリデスの或る定理を更にもう一度證明しようとする者や、既にアリストテレスが説明したところの幸福に關して、更に新らたに説明しよう」と

努むる者や、キケロが論辯したところの、老齡に就ての辨證を再び試みんとする者などは、果して如何なる實を結ぶであらうか。何の實も結ばぬのみか、却つて斯くの如き退屈な餘計な仕事は人の嫌惡を喚起するであらう」。

それよりダンテは、省みられざりし政治哲學方面の研究に就て述べて云ふ、「然るに他の未だ開拓せられずして而も重要な眞理のうち、現世の帝政に就ての知識が、最も重要でありながら而も開拓さるゝところが最も少く、且つ（直接利得に關係がないからして）何人によつても企てられなかつたので、私は此問題を隅から引出さうと思つた。これ一方に於て能く私が世界の幸福のために常に心を注がんとすあり、他方に於て能く私が斯くも大なる名譽の棕櫚を、我が光榮のために、獲得する第一人者たるんがためである。まことに私は困難にして、自分の力を超ゆるところの仕事を企てるのであるが、此は自分固有の力よりも、惜みなく凡ての者に與へて答めたまはぬ者（神）の光に信賴してゝある」（第一章）。

ダンテの論ぜんとするは理想に於ける帝政である。神の聖旨による (secundum intentionem) 宇内の統治である。ダンテの政治的理想をもつて到底實現不可能のものであるとて非難する者があるが、ダンテ自身も彼の理想が直に實現さるゝものは考へてゐなかつたのである。彼は思ひ切り高遠博大な政治的理想を掲げて、人類の進むべき標的を示したのである。「正しき政治の源泉乃至根本原則」の研究である。さて此宇内の帝政に就て三つの事を論究せねばならぬとダンテは云ふ、(一)世界の安寧のために宇内の帝政が必要であるや否や。(二)羅馬人に此宇内の帝政を確立する権能ありしや否や。(三)帝政の権能は直接神に據るや、或は神の代理者(法王)に據るや。是である。

それよりダンテは思索的學問(數學、物理學の如き)と、實踐的學問(政治學の如き)との區別を述べ、次いで一切の政治學説は人類の文明の窮極的目的に照らし

てのみ判定せらるべきものなることを論じてゐる(第二章)。

「然らば全體としての人類文明の標的は何であるかを考察せねばならぬので、是を識る時は……我等の仕事の半ば以上が果たされるであらう。さて問題の要點を領解するために我等の注意すべきは、自然が拇指をつくるのに目的があり、また手全體をつくるのに、他の別な目的があり、更に腕をつくるのに別な目的があり、また一人の人間をつくるのに、以上の諸の目的以外の目的があるやうに、自然が個人をつくるに一の目的があり、家庭的集團をつくるに更に他の目的があり、地方、都市國家、王國の作出に夫々別な目的があり、而して最後に、永遠の神が其業即ち自然により、人類に宇内性を帯びしむるに至つたところの、窮極目的がある……そこで第一に、神と自然とは餘計なものを少しも造らず、凡そ存在するに至りしものは皆何等かの職能を有することを知らねばならぬ……然らば全體としての人類に固有な

或る職能があつて、この職能遂行が、斯く大なる群衆をなす人類の總體の定命であり、また此職能は、一個人も、一家庭も、一地方體も、一都市國家も、一個の王國も遂行し得ないものである」。

進んでダンテは述べて云ふ、「而して此可能性は、同一時に同一人によりて、或は上に區分したところの限定せられたる團體の何れによりても現實化せしめ得られな
いが故に、この可能性の全體を據りて以つて現實化せしむるがために、人類のうちに多様性の存すべきを要する」。即ち全體としての文明の目的は人類の一切の可能性の實現にある。そして此を果たすには宇内的政治統體の各部分の調和的發展と協力とを要すると云ふのが、ダンテの思想である（第三章）。

次にダンテは人類文明の目的實現に對する第一要件は宇内的平和に存することを述べてゐる。即ち全體としての人類に固有な仕事は可能的智性(intellectus possibilis)

の全能力を、第一に思索に、第二に活動に、絶えず現實化するやうにして置くことである。「而して長坐の靜寂のうちにありて個人が知識と智慧とに於て完成せられるのが事實であるが故に、平和の寂靜もしくは靜謐のうちに、人類が最も自由に、また好都合に、人類固有の事業（「なんぢは人を天使らよりはやゝ低きものに造り給へり」と云はるゝが如く、此事業は殆んど神聖〔divinum〕である）の方に促進せしめらるゝ事が明らかである。そこで宇内的平安が、人類の幸福のために定められた一切のものゝうち最善のものであることが明白である。これ即ち基督降誕の夜、天上より牧羊者達にむかひて響き出だされたものが、富にあらず、快樂にあらず、榮譽にあらず、長命にあらず、健康にあらず、力にあらず、美にあらずして、平和であつた所以である。即ち天軍は『いと高きところには榮光神にあれ、地には平和、主の悦びたまふ人にあれ』と叫んでゐる。そこで又、人類の救ひであつたところの者の挨拶が、『汝らに平安あれ』であつた。蓋し至高の救主が至高の挨拶を語るは適はし

いことであつた。而して同様に彼の弟子達は此慣習を保存するを善しと見た、そして何人もその挨拶に見ることが出来るごとく、パウロも其一人であつたのである」(第四章)。

次にダンテは、如何なる種類の集合的活動に於ても、その活動を有効ならしめんがためには、指揮の統一が必要である、従つて人類の集合的活動によりて本來の目的に到達せんがためには、唯一權威の統一的指導の下にあるべき必要を各方面より説いてゐる(第五、第六章)。それよりダンテは全宇宙と人類との關係に論及し、そして一切のものが其性質の許す極度まで、神自身に似ることが、神の聖旨である。ところで統一といふことが徹底的に神のうちに實現されてゐる。そこで人類も神に似て統一せらるべきことが神の聖旨であるが、此事は一人の王の下に統御されることによつてのみ可能であると主張する。斯くの如き議論は近代の我々にとつては、如何に

も縁遠く、到底首肯することは出来ないが、中世紀時代の人々にとりては、有力なものであつたことが疑ひない(第七、八章)。更に第九章に於てダンテは諸天體の統一的運行より推論し、哲人ボエティウスの次の句を引用してゐる――

O felix hominum genus,

Si vestros animos amor

Quo coelum regitur, regat!

あゝ幸福なる人類よ!

もし汝等の心にして

天を支配する愛に支配せられたらんには。

次にダンテは、政治的に獨立せる國家間に爭論の生じた場合に、此を裁定するところの最高權威者たる皇帝の必要なることを論じてゐる。茲に注意すべきは、ダンテの「帝國主義」の眞意は決して一國が他の諸國の上に優越權を把握することなく、寧ろ凡ての國家的狂熱を牽制し得るところの最高法の存在である。即ち近代に於ける國際法の發達と仲裁々判の設定とは、ダンテの帝國主義の内容に一致してゐるのである。たゞ何れにも共通せる弱點は、諸國家をして其政争を最高法廷に持ち來らしめ、而して其判定を容認せしむるところの強制力の缺如である（第十章）。

更にまた世界の安寧を確保せんがためには、正義公正を要する。そこで凡て支配者は正義を遂行する意志と力を有してゐなければならぬ。ところで貪婪な心は正義の大敵であるので、支配者に貪婪な心が有つてはならぬ。而して此は宇內的帝政に於てのみ可能である。「正義の人が有力であればある程、正義はその作用に於てい

よ／＼大であるであらう」〔第十一章〕。

而して人類は、最も自由なる時に、最も善き傾向にある。ところで人性に神の賦與したる最大の賜である此自由を、口にする人々は多いが、その眞意を了解してゐる者が少いとて、ダンテは説明してゐる。そして民主政治（*democratiae*）や、寡頭政治（*oligarchiae*）や、専制政治（*tyrannides*）やは、變則な政治形式であつて、いづれも人類を驅つて奴隸とならしめる。たゞ宇內的帝政の下に於てのみ、人間の自由が完全に行使され得る。アリストテレスはその「政治學」のうちに『邪惡な政治の下に於ては善人は惡しき市民である。而し正しき政治の下に於ては、善人と善き市民とは異語同義である』と云つてゐる。「正しき政治は自由、即ち人類が人類自身のために存在すべきことを、目的とする。即ち茲に於ては市民は執政官のために存在せず、國民は王のために存在せずして、反對に、執政官は市民のために、王は國民の

ために存在するのである……法律の下に生活する人民は、立法者の利益のためでなく、寧ろ立法者は人民の利益のために定められたのである……そこで、執政官や王は、道程より見れば、人民の主君であるが、目的より見れば、人民の僕である、而して帝王は、就中、然うである。即ち帝王は確かに萬人の僕として見做されねばならぬのである」(第十二章)。

人は自己を制御する以上に、他人の心を善き方向にむけしむることが出来ない。統治者自ら全く貪婪の心より脱却するに非ざれば、臣民を貪婪より自由ならしむることが不可能である。そして統治者をして全く貪婪より自由ならしむるには、彼を宇内の帝政の主権者たらしめねばならぬ(第十三章)。但し統一といふも、それは人類生活の根本的乃至共通的方面に於けるものであつて、政治の實際的方面に於ては地方の事情によりて種々相違あるべきである(第十四章)。また事物は、統一性をよ

り多く有することによりて、存在性はいよ／＼確實となり、而していよ／＼善となる。「一」は「善」の根柢であり、「多」は「悪」の根源である。罪を犯すといふは、「一」より離れて「多」を追ひ求むることに外ならぬ。善き社會に於ては多くの意志が協力一致して活動せねばならぬ。この點より見るも、萬人を統一指導するところの宇内の統率者を必要とするのである(第十五章)。かくて最後にダンテは、基督の降世が、世界史上最も平和であつて、完全に宇内の帝政の實現されてゐた皇帝アウグストゥスの時代に起つたと稱して、彼の議論の權威としてゐる。そして世界の現狀を慨嘆し、詩篇第三百三十三篇の第一節「視よはらから相睦みてともにをるは、いかに善く、いかに樂しきかな」を引用してゐる(第十六章)。

第二篇第一章の劈頭にダンテは詩篇第二篇「如何なれば諸の國人はさはぎたち、民等はむなしきことを謀るや。地のもろ／＼の王はたちかまへ、群伯はともに議り

エホバとその受膏者とに逆ひていふ、われらその桎梏をこぼち、その繩をすてんど」を引用してゐる。それより彼は羅馬人の歴史に於ける神の聖旨と攝理とに就て論ずる。「私もまた、羅馬人が何人の抵抗もなしに地球上に優越するに至つたかを不思議に思つた時があつた。即ち、私はたゞ外面しか見なかつたので、羅馬人が優越するに至つたのは、何等の權能によつてなく、單に武力によつたのであつたと云ふのが、私の考へであつた。然し今私はわが心の眼をもつて、その精髓に透徹し、また最も確實な徵證によつて、斯く成らしめたのは神の攝理であつたことを識つたので、我が驚愕は消え失せた」。そこで此事を未だ知らずして僭越な行動をする王公等の妄を解かんがために此篇を書くのである（第一章）。

一切の善は、本源的には、神の心のうちに存在するのであるからして、公正乃至權能の規範は神の意志のうちに見出されねばならぬ。ところで神の意志は眼に見えぬが故に、此を探求するに當り事情の許す限りの確實さの程度で満足せねばならぬ。封印は、秘されてゐるが、而も封印によりて印銘された封蠟は、封印に就ての明白な智識を與へる（第二章）。

さて羅馬人が全人類を支配すべき使命と職責とを有してゐたといふ證據の一は、その高貴なりしこと（nobilitas）である。「最も高貴な人民が他の凡ての人民の上に置かるるは妥當なことである。然るに羅馬人は最も高貴な人民であつた。故に羅馬人が他の凡ての人民の上に置かれたのは妥當であつた」。

かくてダンテは羅馬人の祖先アエネアスを讚美して、次の句を引用してゐる――

Rex erat Aeneas nobis, quo iustior alter

アエネアスは我等の王である、敬虔に於て彼よりも
正しき者なく、劍戟に於て彼より大なる者がなかつた。

そしてアエネアスの一身に、世界の各部よりの血液が流入したことを立證してあ
る（第三章）。

次にダンテは羅馬人の此世界支配權は、羅馬史上に現はるる奇蹟によりて證明せ
られると云ふ（第四章）。更に羅馬人は公共的精神を著しく有してゐた。これ又彼等
が世界的統治者たり得る證據の一つであつた。その行爲に於て、かの公共的安寧の
常敵であるところの一切の貪婪を驅逐し、自由を慕ひ、宇內的平和を愛しつゝ、こ

の神聖にして、憐憫に富み、而して光榮ある人民は、ひたすら人類の安寧を望んで、
自己の利益に思ひを寄するとは見えなかつた。そこで “*Romanum imperium de
fonte nascitur pietatis.*”（羅馬帝國は同情の泉より生れた）と云ふは至言である。そ
してキケロの言葉「この故に彼等（羅馬人）の統治は、世界に對する號令といふよ
りも、寧ろ世界の保護と稱せらるべきであつた」を引用してゐる。更にダンテは續
けて云ふ、「汗と、窮乏と、追放とにより、子等を失ひ、肢體を損じ、而して最後に
己が生命をすら獻ぐることによつて、公益の進展を圖つた者等をさして、公益を追
ひ求めなかつたと云ひ得るだらうか。リネウスの述ぶる如く、田園より出で、獨裁
官となりながら、勝利と凱旋の後に、號令の笏を執政官等に返し、そして己が自由
意志により、彼の牡牛を追ふて耕作に汗すべく歸つた時、あの偉大なるキンキンナトッ
スは適當な時に、進んで職を去る聖い模範を我等に貽したではないか」。續いてダン
テは「世界に自由に對する愛を點火せんがため、自由を失ひて生き残らんよりは寧

ろ自由の人として世を去らんことを欲して、如何に自由を尊重したかを立證した」
ところの哲人カトを擧げ、「彼にとりては、暴君の顔を見るよりは、死する方が適は
しかつた」と云つてゐる。その他幾多の人物に就て述べてゐる（第五章）。そして斯
くの如き精神を發揚したところの羅馬人は、確かに世界的統治の權利を有してゐた
ことが明らかであり又當然であると云ひ、「アエネイス」第六篇にある次の句を引用
してゐる——

Excudent alii spirantia mollius era,

Credo equidem; vivos ducent de marmore vultus;

Orabunt causas melius caelique meatus

Describent radio, et surgentia sidera dicent:

Tu regere imperio populos, Romane, memento;

*Hae tibi erunt artes, pacisque imponere morem,
Parcere subjectis et debellare superbos.*

わしは良く信ずる、他の者等は、尙も柔らかに息氣する

銅像を鑄造し、活ける像を大理石より作り出し

尙も良く原因を論じ、天の運行を測定し

そして昇る星辰のことを語るであらう。

羅馬人よ、汝は人民を號令統治することを心とせよ。

平和の慣ひを布き、従ふ者を寛恕し

傲る者を征服すること、これが汝の仕事である。

次にダンテは神の審判を如何にして知るべきかに就て詳論し（第八章）、争闘によ

れる勝利は、此を知る有力なる方法であるとし、他の多くの國民も、世界統一を企てたが、皆失敗し、只羅馬人のみが成功した。この事實に照らして見ても、羅馬人に對する神の聖旨が奈邊にあつたかが明瞭であると云つてゐる。

「即ち此獲物（世界統一）を得んと喘ぎし人間等の中の第一人はアッシリア人の王ニヌス（Ninus）であつた。彼は彼の寢床の伴侶セミラミス（Semiramis）と諸共に、世界的帝國を建設せんとして、オロシウスの傳ふる如く、九十有餘年の間、武装して努力し、そして全亞細亞を自己に屈服せしめたとは云へ、未だ世界の西部は遂に彼等に臣従しなかつた……第二に、埃及の王帝エゾゲス（Zogues）が此獲物を憧憬した。そして、オロシウスの傳ふる如く、彼は亞細亞の南北を旋捲したとは云へ、決して世界の半分を獲得するに至らなかつた……次に、波斯の王キルス（Cyrus）が同じ事を企てた。彼はバビロニアを滅ぼして其帝國を波斯人に譲り渡したが、西方諸國に遠征を試むるに先立ち、彼の生命と彼の企圖とを共に、スクティア人の女王ミリス

（Tamiris）の手に委ねてしまつた。それからクセルクセス（Xerxes）も失敗し、亞歷山大王も失敗した。これは皆神の攝理であつた。然るに羅馬は此光榮ある事業に成功した。

それよりダンテはギルギウス、ルカヌス、ボエティウス等の句を引用し、聖書の言葉をも引いて、論證してゐる（第九章）。

さて正邪曲直を決定し兼ねる時に、人は血を以つて、死をもつて争ひ、斯くしてまでも正邪を明らかにしようとする。決闘（duellum）の起原は此である。決闘は双方承知の上にて行はるるもので、それは憎悪からでなく、公正を慕ふからである。全心全力をこめての眞剣な搏撃によつて、神の審判を知らうといふのである。但し戦争といふが如き問題に至つては餘程慎重に考へねばならぬ。争論を先づ裁判的方法によつて解決するやうに凡ゆる手段を盡さねばならぬ。戦争は最後の手段である。

恰度手術に於けると同様、鋼鐵と火とを用ふる前に、凡ゆる方法を試みねばならぬ。「かくて辯論によりて解決を見出す他の凡ての方法を盡してしまつた時、正義の一種の強制に餘義なくなされて、我等は止むを得ず最後に此解決法を探るのである」。かくてダンテは云つてゐる、苦し以上のやうな精神を抱くことなくして戦ふ者があるならば、それは流血を事とする商賣人である（第十章）。そして以上の見解に基づき、羅馬帝國が幾多の闘争によつて確立したものであることを詳述してゐる（第十一章）。

次にダンテは云つてゐる。羅馬帝國の此使命と權威とに對して甚しく異議を抱いてゐるのは教會の僧侶達であるが、「彼等は基督教的信仰の熱信家であると自稱するも、基督の貧しき者に對して少しも憐む心を抱いてゐない。そして只に此等の者は諸會堂の歳入を詐收するのみでなく、教會自身の世襲産を日毎に掠めてゐる、斯く

して教會は窮乏するに至り、公正を裝ふ彼等は、公正を施行すべき者を追ひ出してゐる……自家一族の財産にして増加する限り、教會の財産の流出し去ることが何であらう」と。

それよりダンテは、基督はアウグストゥスの勅令に服従したまふたが、若しアウグストゥスにして世界の正當な支配者でなかつたとすれば、斯くの如き事は到底考へられない事であると論じてゐる。更にまた、羅馬帝國の權威が基督の贖罪の大業に重要な關係があると云つてゐる。そして以上の理由により、羅馬人は當然世界的統治の權能を獲得したことが、十分立證せられたと斷じ、最後に「あゝ祝福されし民よ！ あゝ光榮ある汝、アウツニア！ 汝の帝國を衰微せしめた者の、生まれざりしならんことを願ふ、或は己が熱信なる志によりて過まられざりしならんことを願ふ」と叫んでゐる（第十二、十三章）。

第一篇に於て宇內的帝政の確立の必要を篇じ、第二篇に於て羅馬人が此大使命を遂行する權能を有してゐた事を述べたダンテは、第三篇に於て羅馬帝國の權威は直接に神より來たるや、或は法王に據るものであるかを論ずる。冒頭にダニエル書第六章の第二十二節「神獅子の口を閉ぢさせたまひたれば、獅子は我を害せざりき。そは我れの正しきこと彼の前に明らかなればなり」を掲げてゐる。そして「此事に就ての眞理は、或る人々を赤面せしむることなしには、披瀝し得ないので、恐らくは私に對する憤怒を起さすであらう。然し『眞理』がその變はることなき王座より斯く爲せと要求し、ソロモンもまた……眞理を冥想し、而して不虔の人を誓つて根絶せよと教へ、また道德の師なる『哲學者』(アリストテレス)も、眞理のためには友情をも犠牲にせよと我等に説いてゐるが故に、上掲のダニエルの言葉より勇氣を得る。この言葉によりて、神の力、即ち眞理を擁護する如き楯が與へられる」と(第一章)。そして先づ自然の意向は神の意志に反するものでないことを述べてゐる(第

二章)。

さて大抵一般の場合に於ては、無知が爭論の原因となるのに、今論ぜんとする此問題に於ては、寧ろ爭論が無知の原因となつてゐるのである。理性の聲に耳を傾けずして、己が意志のまに／＼生活する人々は、感情や意慾に率ゐられて、盲人の如くに行動しながら、而も頑冥にも盲目なることを否認する。そして他人の範圍に迄侵入し來るが、自己のことさへ分からぬ彼等には、何事も分かる筈はなく、斯くて彼等は、人々の或は忿怒を喚起し、或は嘲笑を招くのである。

そこで以下論述する事に關して反對する人々のうちには、教會を愛し、法王を尊敬する熱心よりする者もあるであらう。然し貪慾が痼疾となつて理性の光を滅却し、「自ら教會の子等であると稱しながら、惡魔を父としてゐる」者共がゐて、神聖なる羅馬帝國の使命を否定してゐる。更に第三に、「凡ゆる種類の神學および哲學に對

して門外漢であり無知であるところの、法王令學者 (Decretalistas) と稱せらるゝ者がゐて、帝國を貶し、法王令を此上なく尊いものとしてゐる。その中の一人が、教會の傳説は信仰の基礎であると宣言し、且つ滔々主張するのを私は聞いたことがある。斯くの如き不虔な思想は絶滅されてあれかし。教會に先立ちて舊新兩約書があつた。教會の傳説は尊重すべきものではあるが、根本的聖經即ち聖書に比しては、劣れるものとせねばならぬ。權威は傳説によつて教會に加へられるのでなく、教會によりて傳説に加へられるのである。そこで本問題を論ずるに當り、傳説を根據として立つ者等を度外視して置く。たゞ教會に對する熱心よりして、此重大なる問題の真相を知らうとする人々をのみ對象として論ずることにする。孝順なる子が父に拂ひ、孝順なる子が母に拂ふところの恭敬の心に信頼して、彼等とともに私は…基督に對する義務として、教會に對する義務として、牧會者に對する義務として、基督の信仰を告白する凡ての人々に對する義務として—真理の名分に於て、本書の

論争に入ることにする(第三章)。

さて創世記に従へば、神は、二つの光體を造り給ふた。即ち一は大なる光であつて晝を司る太陽であり、他は小なる光であつて夜を司る月である。そして月は太陽より光を受けて照るものである。この太陽は教會の表象であり、月は帝國の表象である。これ即ち帝國が教會に據るべきものなることを示すものであると論ずる者がある。ダンテは先づ此説を駁し(第四章)。その他舊約聖書の記事に基づける類似の諸説を論破する(第五章)。次で、基督の降誕の際、東の方よりの博士たちが來たりて禮拜し、「寶の盒、黄金、乳香、沒藥など禮物を献げた」といふマタイ傳第二章の記事に基づきて、基督は政教兩方面の王である、斯くて基督の代理者たる法王も等しく政教兩界の主權者であらねばならぬと主張する説を駁撃する(第六、七章)。更に、ペテロに對する基督の言葉「なんぢが地に於て繫ぐことは天に於ても繫ぎ、な

んぢが地に於て釋くことは天に於ても釋くべし」に基づき、ペテロの後繼者なる法王は、天上の事および地上のことを司る權があるとの説や、またルカ傳第二十二章第三十八節「主見よ茲に二つの刃あり」に基づける同様の説を辯駁してゐる(第八章、九章)。

引續いてダンテは、歴史に基づける議論に就て述べてゐる。即ちコンスタンティヌス大王が法王シルエスタアに帝國の座所即ち羅馬を與へたと云ふ事を根據とする議論である。此に對してダンテは云ふ、「帝國の權限を讓與する權能はコンスタンティヌスに無く、また此を受くる權能が教會になかつた」と。更に法王ハドゥリアヌスがシヤル・マニユに皇帝として權能を賦與したが故に、教會は帝國の上に立つべきものであるとの議論に對して、ダンテは云つてゐる、これは單に法王の僭越であつて、若し斯くの如き論法をもつてすれば「皇帝オットが法王レオを復位せしめて、ベネ

ディクトゥスを廢黜し、これをザクセンへ追放したがゆえに、教會の權能は皇帝に據ることも論ぜられるではないか」と(第十、十一章)。

次に理論上よりして最高の主權者は一人でなくてはならぬ、而して法王と皇帝のうち、法王が皇帝に從屬すべからざることには明らかであるので、當然皇帝は法王に從屬すべきものであるといふ説がある。此に對してダンテは兩者の職務の相違する事を述べ(第十二章)、進んで帝國の獨立的權能が基督及びパウロによつて承認されたと云つてゐる(第十三章)更に彼は云ふ、「もし教會にして、羅馬皇帝にその權能を與へる權限を有してゐたとすれば、それは神よりか、或は自己よりか、或は或る皇帝よりか、或は人類の普遍的承認によるか、或は少くとも人類の大多數の承認によつて、受けたものでなくてはならぬ」ところが教會は此等のうちの何れよりも、斯くの如き權能を獲得した事がない(第十四章)。基督の言行は教會の模範であるべ

きであるが、基督は「我が國は此世の國に非ず」と明言された。此を以つて見るも、教會は地上の政治的權力に全然關はるべきでないことが明白である（第十五章）。

さて以上論述するところに據つて、帝國の權能が教會に憑依しないものであることが明白となつたが、進んで皇帝の權限が直接神に據るものであることを論證せねばならぬ。そもく人間は、朽つべき肉體と、朽つべからざる靈魂との、二つより成つてゐる。かくて人生には二大目的が存する。即ち一は現世の生を完全にすることであり、他は自己の靈的生命を完うすることである。第一の目的を達するためには、理性が與へられてをり、第二の目的を達するためには、天啓が與へられてゐる。然し墮落せる人類を眞の道より迷ひ行かざらしめるために、指導的權力が必要である。「即ち天啓に基づき人類を導きて永遠の生命に至らしむるところの至高の法王と、而して哲學の教に基き人類を導きて現世的福祉に至らしむるところの皇帝とを

要するのである」。人間は平和と自由とのうちに於て、最も能くその能力を發揮し、また生を完うする。而して世界の平和秩序を保持するのが統治の目的である。斯くて帝國は教會と共に、神の世界經綸の根本的の二大制度である。そこで皇帝を選舉する大責任ある「選舉侯」(Electors)は、神の攝理の傳達者等と云ふべきである。

以上三篇を通じて、宇內的帝政が世界の安寧幸福のために必要なこと、羅馬人が世界的統治の權能を有してゐたこと、および帝國の權能が教會に憑依せずして、直接神に據れるものなることを論證した。然し最後に特にダントは注意して云つてゐる。第三の論點即ち帝國の權能が直接神に據ると云ふのは、羅馬皇帝が羅馬法王に對して全然從屬すべき必要がないと云ふのではない。或る意味に於ては、現世的幸福は、不朽の心靈的福祉によつて整定せらるべきである。帝國は獨立的權能を有すべきではあるが、決して教會に對抗すべきではないと（第十六章）。

以上の梗概によつて知らるゝ如く、「帝政論」は嘗て書かれし統治論のうち最も純粹に理想的なものである。ダンテは先づ帝國と教會とを社會構成上必然なものとして前提してゐる。これ無くば社會の存在は考へられぬものとしてゐる。そして本書はその各の統治の限界を定めようと企てたものであつた。確かにこれは謂ゆる普通の政治家の作でなうて、哲學者のそれであつた。現實の社會を基礎として論ぜずして、獨斷的前提より出發したものであつた。具體的國家の組織でなくて、宇內的帝國—或は宇內的共和國と云つてもいい—の理想を説いたものであつた。そして論述の仕方は遒勁で雄辯ではあるが、中世紀的缺點の凡ての特徴を有してゐるのは止むを得ない。精妙な議論が、空想的な前提のうへに築かれてゐる。論證の方法はスコラ的であつて、論理は形式的に整然たるものであるが、その使用する資料乃至典據の價值如何については殆んど考量を煩はさなかつた。それにダンテは政治論に於て反動對であつた。彼は當時の政治的運動を誤認した。即ち當時に於てさへも既に時

代遅れになつてゐた「世界的帝國」説の代闘者として立つた。この點に於て彼の政治論は古色を帯びて見える。然し何しろダンテの出現が、ルウテルの宗教改革によつて國家觀念に一大變化を來たした前二百年であつたことを思ふ時、我等は彼の思想の遠大崇高なるに驚かざるを得ないのである。殊に羅馬教會は、現今に於ても、依然としてダンテの教會觀を持続してゐる。而して良く見ると彼の政治説は抽象的なコスモポリタニズムでなくて、愛都心、愛國心の擴大したものであつた。また彼が「帝政論」を書くに至つた動機は、單なる思索的興味からでなくて、彼自ら政争に苦しみ、遂にその惨ましき犠牲となつた混亂より人類を救はんがためであつた。その結果彼は一の絶對的な政治的權力の確立の必要を感じたのであつた。この點よりして見る時は、後世國家論者として名高いジャン、ボウダンの君主々權論のごとき、トマス・ホッブスおよびフリドリヒ、シュタアルの國權神授説のごとき、其形式は異り、従つて直接その影響を受けたとは云へなからうが、ダンテの「帝政論」が、

此等の人々の先驅であつたとも考へ得られる。國家内の自由と秩序、君主の専制と人民の放肆とを能く制遏し、近世立憲國の基礎を据えたところの偉大なる法理學者モンテスキュの精神は、確かにダンテの精神であつた。今日我々が見て以つて、國家は斯くの如くあれかしと思ふ節々が本書のうちに少からずある。シユロツセル—Schlozer—はダンテの政治組織を北米合衆國のそれに比してゐる。或は寧ろ *of fact* holder の下に統治さるゝネデルランドの憲法に似てゐると云はれる（スピノザの「政治論」第六章參照）。

ダンテの政治哲學の根本原理は統一および自由の二つであつた。この中「統一」は中世紀に於て重大視されたものであり、「自由」は近世に於て尊重さるゝものである。ダンテに先立つてトマス、アクィナスはその「帝政論」一の二に「自然界を見るに、人間の身體は心これを統制し、群蜂には一匹の王あり、宇宙に一の神あり」と云つてゐる。最上の存在とは最大の統一の謂であり、最大な統一の存する處に最大

の善があるといふのが中世紀の信條であつた。ダンテが人類の社會生活に於て統一を重んじたのは當然であつた。然し宗教および道德に於けるがごとく、政治に於て自由を尊重した點に於て、ダンテは著しく近世的である。古代および中世の人生觀は常に幸福といふ觀念より出發した。トマス「アケムピスの *Imitatio Christi*」—「基督に倣ひて」—の如き強い禁慾主義的書も、その根柢に於ては幸福といふ觀念に立脚してゐる。宗教的功利主義に根據してゐる。古代希臘のソクラテス、プラトオン、アリストテレスのごときも皆さうであつた。斯く考へると、人生觀の立脚地が、幸福といふ觀念より自由のそれへ移されたことは、人類の思想の一大進歩を劃するものである。最大の自由を得た時、人類は始めて最善の秩序に到達するのであるとダンテは主張する。而してダンテの云ふ自由とは、第一に意志の自由、即ち判断の自由で、己が慾望の是非善惡を判断し、これを制御し得ることを指す。この意志の自由を獲得して始めて人類は自己の主人となることが出來、最善の秩序が保たれる。

而して茲に人類の幸福なる状態が存すべきである。而してこの自由は到底暴君政治は素より、寡頭政治、民衆政治に於て獲得せらるべくもなく、完全な君主の統治の下に於てのみ可能であるといふのがマンテの思想であつた。然し意志の自由が、直ちに君主政治の下に於て確實に保證せらるべしといふ論断は、我等の耳には餘りに抽象的に聞える。

統一尊重の思想は彼を驅つて、世界平和論の提唱に導いた。世界的平和といふ觀念は、アレキサンダ大王の世界的帝國の建設が動機となつて、アリストテレスおよびストア派の稱導したところであつた。マンテの國際平和論には徹底しない點がある。彼は戦争を絶滅する方法として、戦争を承認してゐる。戦争の勝敗をもつて神の審判と見做してゐる。即ち多くの主戦論者の陥つた罠に彼も同じく陥つてゐる。しかし我々はこれを咎むるに及ばないのである。たゞ彼が當時の紛亂せる政治の渦中に身を投じながら、常に世界の平和に對する憧憬にいよく熱心になつて行つた

ことを見て深い感激を覚えるものである。無論それは實現不可能のものであつた。然し彼以來世界の優秀なる精神は國際平和のために思索もし努力もした。中世の亂終り一六二四年に有名なフゴ・グロティウスは國際法を建設し、實際的方面に於てはアンリ四世の考案と稱せらる、シユリイの國際聯盟の思想が起り、エストファリア和約に於て歐洲諸國協同の最初の試みがあつた。一六九三年にはキリアム・ペンが平和論を公にし、ウトレヒト和議後一七一三年にサン、ピエルの平和の提案が現れた。大哲カントは法の完全なる實現は永遠的平和の状态に於て始めて期待せらるゝなし。永遠的平和をもつて、彼の法理哲學の「全窮極目的」とした。彼のこの理想は 'idealistische Traumerei' (理想家的夢) とか 'unpractische Phantasterei' (非實行的な幻想) とか稱せられて罵倒せられた。カント自身も彼の理想が直ちに實現し得られないものとは考へずして、これを 'frommer Wunsch' (敬虔なる願望) に止まるとした。確かにそれは實現が近き將來に於て困難であらう。然し世界のことを思ふ者の頭腦

のうちに必ず往來せざるを得ない理想である。何等かの形に於て一の超國家的權力の必要を考へずにはをられない。この點に於てダンテの「帝政論」は永久に時代遅れとなることがない。「戦争を根本的に防止することが出来る唯一の手段は、諸國民間に於ける凡ての争論を法律で裁決するに足る程有力なる世界國家、即ち超國家を創造するこである」とベルトランド・ラッセルは云つてゐる。

さて本書は何時頃書かれたものであるかに就て種々論じられた。ダンテの個人的生活に關する引照がなく、一定の時期の事件についても書いてないので日附を定めることが困難である。本書には流竄のことも全然書いてないが、この點に於て、「俗語論」「饗宴」および「書翰」と著しい對照をなしてゐる。それに全書アカデミックな平靜を帯びてをり、また直接ハインリッヒのことも記してないので、ギッテやノルトンは、追放前に書かれたものであるとしてゐる。この説も根據なきものではないが、

「饗宴」と本書との間の内證的關係を詳細に研究して見ると、「饗宴」の方が先に書かれたことが分かる。一例を挙げれば「高貴」—nobilita—に關するアリストテレスの有名な定義を、ダンテは「饗宴」を書いた頃には知らなかつたらしく思へる。然るに「帝政論」に於ては知つてゐる（饗、四の三の四四、および帝、二の三の一五比較参照）。その他教會と國家、瞑想的な生活と活動的生活との關係についての思想は、「饗宴」に於けるよりも「帝政論」に於て圓熟してゐる。その他一般に、思想の鍛鍊せられる點、伊太利亞の政治に憤慨せる點等より見て、「帝政論」がダンテのフィレンツェ在住中の作としては解し難い點が多い。ボッカッチオはハインリッヒ七世伊太利亞南下の際の作であるとしてゐる。或は然うであつたかも知れない。本書と天國篇とのあひだに甚だ似かよつた點がある。思想に於て表現の方法に於て類似するところが少くない。故に明確に日附を擧げることが困難であるが、大體追放後期の作とする方がよいと思はれる。

著者が希望したにも係らず、本書は直ちにダンテの名聲を高むるに至らなかつた。死後数年、パワリア公ルイスと法王ヨハンネス二十二世との間に争論の起るに至つた迄は餘り知られなかつた。ポッカッチオ曰く「公とその従者達とは、ダンテのこの書を發見して、彼等と彼等の權威との辯護論に利用し始めた。そこで此時まで始んど知られなかつた本書が甚だ有名となつた」。後ポッチェットの『カルディナレ』ベルトゥラント—Beltrando—は本書を禁止し、公然火中に投じて、異端説を含む旨を宣言した。同じく彼は著者の遺骨を焼かうと企てた。もしピノ・デラ・トザ—Pino della Tosa—と稱する一人の善良にして高貴なる騎士によつて反對せられなかつたならば、然うしたであらう」。

大正拾三年十二月五日印刷
大正拾三年十二月八日發行

ダンテ全集第九卷

詩聖ダンテ

〔定價金參圓〕

著者 中山昌樹

發行所 河本哲夫

東京市神田區北神保町二番地

印刷者 宮下桃太郎

東京市小石川區戸崎町九十四番地

發行所 新 生 堂

東京市神田區北神保町二番地

振替口座 東京六六二七三番
長野三四四六番

集全テンダ

第一卷	神曲(地獄篇)	七月既刊
第二卷	神曲(煉獄篇)	九月既行
第三卷	神曲(天國篇)	拾月刊行
第四卷	新生・詩集	以下續刊
第五卷	饗宴	
第六卷	俗語論・水陸論	
第七卷	帝政論・書翰集	
第八卷 <small>(別冊)</small>	詩聖ダンテ	
第九卷 <small>(別冊)</small>	ダンテ神曲の研究	
第十卷 <small>(別冊)</small>	ダンテ研究	

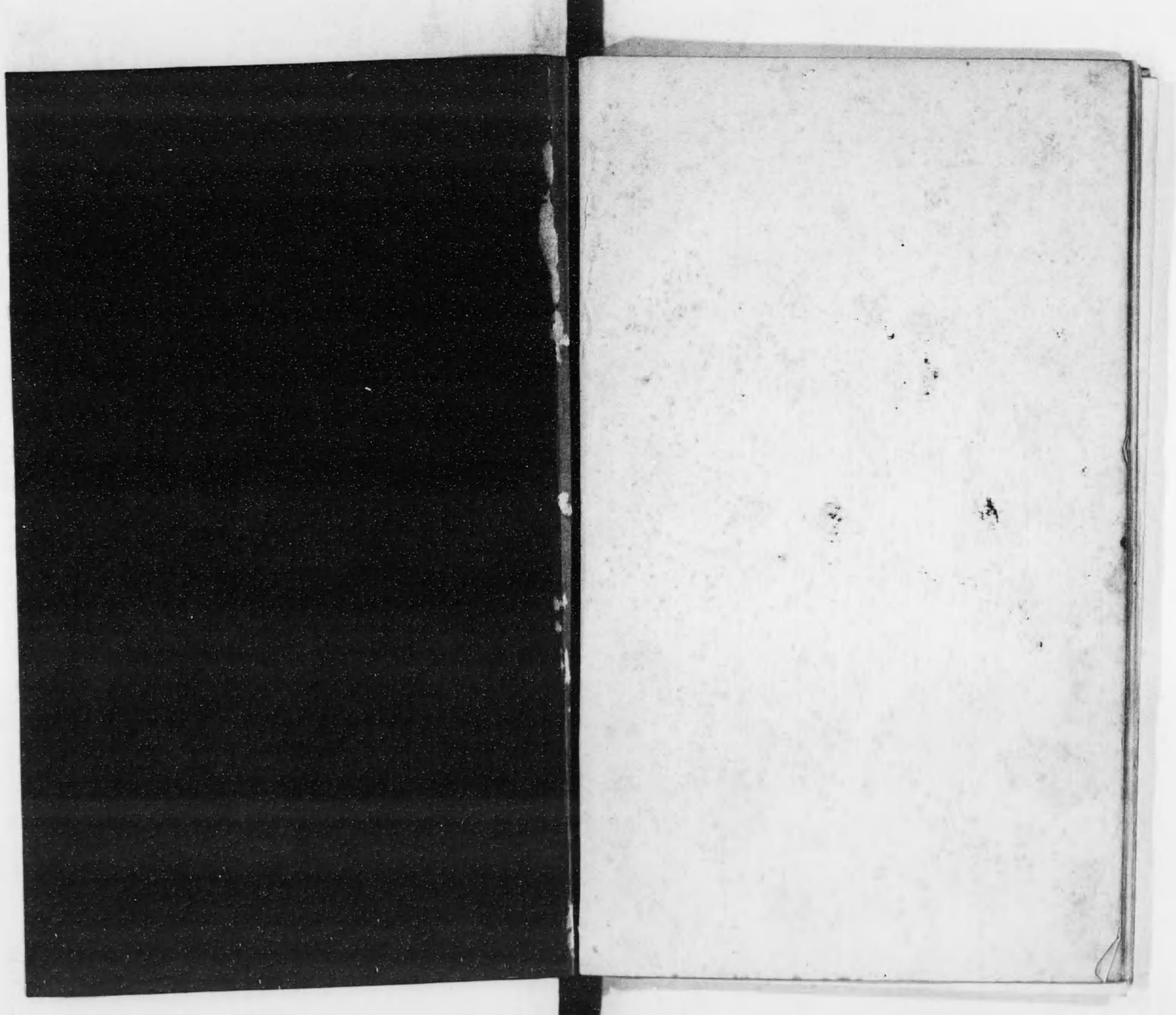
以上全十卷

定價各卷金參圓送料拾四錢

七月既刊
九月既行
拾月刊行
以下續刊

四天
六金
判總
各布
卷表
六紙
百箱
頁入
內美
外本

—(呈進本見容內)—



501
214

終